

第11回

さくらサミット in 北郷

～人にやさしく、桜にやさしい、環境づくり～

宮崎県 北郷町

目次

タイムスケジュール	1
参加自治体出席者	2
さくらサミット～第1部～	
開会	3
さくらサミット大賞・押し花絵コンクール受賞者	4
柳生博氏基調講演	5
生きもの地球紀行	6
世界から見た日本	11
私の八ヶ岳	14
サミット討議	16
はじめに～環境基本計画とビオトープ～	16
各自治体の紹介～新潟県 上越市～	19
ディスカッション ～ISO の取得と諸問題～	24
各自治体の紹介～群馬県 鬼石町～	28
～茨城県 日立市～	32
ディスカッション ～さくらの管理とボランティア～	35
各自治体の紹介～宮崎県 北郷町～	39
ディスカッション ～さくらの道～	40
まとめ	42
共同宣言	44
次期開催地の紹介	45
さくらサミット～第2部～	
開会	46
今後における諸課題	47
常設連絡事務局	47
サミット参加自治体の定義	61
サミット内会議の役割と権限	62
まとめ	62

タイムスケジュール

99.4.4.Sun サミット第1部

14:00 開会

14:20 基調講演

講師：柳生博氏

演題：森と暮らす、森に学ぶ

15:30 サミット討議

参加自治体：15 団体

コーディネーター：篠田伸夫

テーマ：「人にやさしく、桜にやさしい、環境づくり」

17:35 共同宣言・次期開催地発表

17:20 閉会

99.4.5.Mon サミット第2部

9:30 開会

参加自治体：15 団体

議題：さくらサミットの今後の運営とあり方

11:00 閉会

11:15 記念植樹

参加自治体出席者

北海道 静内町 助役	野表 治夫
秋田県 角館町 文化財課 参事	黒坂 登
茨城県 日立市 助役	吉成 保壽
群馬県 鬼石町 町長	関口 茂樹
埼玉県 幸手市 市長	増田 実
東京都 北区 地域振興部 参事	中澤 正俊
新潟県 上越市 助役	藤原 満喜子
新潟県 加治川村 村長	秦野 喜平
長野県 高遠町 町長	北原 三平
岐阜県 根尾村 村長	道下 多喜雄
奈良県 吉野町 町長	福井 良盟
島根県 木次町 産業振興課 課長	本田 宏
長崎県 大村市 助役	島 信行
熊本県 水上村 助役	上原 吉朗
宮崎県 北郷町 町長	植野 章一

さくらサミット～第1部～

開会

【北郷町・植野】皆さん、ようこそ緑と清流と温泉のまち北郷町へおいでいただきました。心からご歓迎申し上げます。花と緑に包まれたもっとも美しい季節を迎える宮崎県におきましては、全県をあげて開催されております「グリーン博みやざき」の期間中に、北郷町におきまして「第11回さくらサミット」を開催させていただくことはまことに意義深く、関係各位に厚く御礼申し上げます次第でございます。

本日は、サミット参加自治体の皆様をはじめ、ご来場いただきましたすべての方々におかれましては、新年度早々の大変お忙しいなか、しかも、遠くは北海道より遠路多数ご参加をいただきまして、心から厚く御礼を申し上げます。

今回のさくらサミットのテーマは「人にやさしく、桜にやさしい環境づくり」であります。桜はふるさとの情景を思い浮かばせるとともに、日本の文化や精神の創造に大きなかわりを持ってまいりました。今、地球規模の環境問題が議論されるなか、ふるさとの快適な環境をどう維持し、次の世代へと引き継ぐのかといった問題に真剣に取り組むことが必要であります。

本日は、俳優で、特に自らも大自然に飛び込み、環境問題にもお詳しい柳生博先生を講師にお招きし、基調講演をお願いいたしております。また、参加自治体の皆様の先進的な緑化や環境対策につきましても、情報の提供をいただきながら、意見の交換をさせていただくこととしております。

また、今回は九州郵政局のご支援や、押し花グループの皆さんをはじめ全国の押し花愛好家の皆様のご協力による「第3回さくらサミット・押し花絵コンクール」の開催や、宮崎県ご当局のご支援などをいただいてさくらサミット関連イベントを実施させていただいたほか、町内自治公民館の花いっぱい運動の展開、福祉団体の皆様による花の植栽など、各方面で多くの方々のサミット開催へのご協力をいただきましたことに、この場をお借りいたしまして厚く御礼を申し上げます。

最後になりましたが、今回のサミット開催にあたりましては、参加自治体の皆様はもとより、コーディネーターをお願いいたしました篠田伸夫先生をはじめ、諸準備をいただきました関係各位に厚く御礼を申し上げ、本日参加いただきました皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、簡単ではございますがごあいさついたします。ありがとうございました。

第3回さくらサミット大賞・押し花絵コンクール受賞者

大賞～北郷町長賞～	氷室 桂子
～九州郵政局長賞～	高尾 あけみ
北郷郵便局長賞	日高 紘一
審査員奨励賞	大堀 節子
財団法人日本手芸普及協会賞	永坂 まゆみ
ふしぎな花倶楽部会長賞	石田 千恵子
佳作	井上 多美子
	塩瀬 光代
	桑野 正恵
	大田 順子
	栗原 佳子
	塚田 訓子
	田淵 もと江
	富田 もとこ
	鎌田 千鶴子
	田中 喜美子
	古賀 弘子
	田崎 ふみ子
	松田 由基子
	綾部 素世

柳生博氏基調講演



【柳生】柳生でございます。今日、お話ししたいことは二つあります。ここにいらっしゃる方はたぶんどなたもやったことがないようなことをぼくは長い間体験しております。一つは、NHKで「生きもの地球紀行」という番組を8年間やらせていただいているのですが、その役得といいますか、おかげさまで、たぶん皆さんがまず絶対に行けないであろうような場所へ、毎年、何度も行かせていただいております。そのみやげ話をとってみたいです。そのみやげ話をすることが桜を語ることかなというようなことも考えているのですが、そちらをやるととてもじゃないけど時間がなくなります。

もう一つは、私は24年間、本当に小さな、この町よりももっともっと小さな村にずっと住んでおります。八ヶ岳の南麓の、標高1350メートルのところに住んでおりますので、その話をしたいと思います。桜でいいますと、今日は北海道の静内からおいでの方がいらっしゃると聞きました。それから秋田の角館からもおいでですが、秋田よりももう少し寒い、静内よりももうちょっと暖かい、それぐらいの季節感の中で住んでおります。ですから、私のところで桜が咲くのは5月の連休が終わったぐらいのときです。そういうところに住んでおります。

八ヶ岳というのはどのへんにあるか。この中で3人だけ、八ヶ岳においでになったという方と先ほどお会いしたんですけど、たぶん、ほとんどの方はどこにあるかはわからないと思います。本州を、青森から串刺しにして、下関から串刺しにして、ちょうどぶつかったあたりです。日本海に行くにも、太平洋に行くにも、どちらに行くにもちょうど真ん中ぐらい。そこに大きな山のかたまりがあります。八ヶ岳連峰です。その中で一番大きな赤岳は2899メートルですが、その南側に私は住んでおります。1350メートルです。

いいご身分でそこで遊んでいるのかというと、そうではなくて、1年のうちのだいたい半分をその小さな村に住んでおります。残りの半分の3分の2ぐらいを、東京にも家

がありますので、そこで仕事をしております。ひたすら仕事をしております。そして残りの3分の1は、先ほどちょっと自慢げにいいましたが、皆さんが絶対に行けないであろうような海外の僻地に行って撮影しております。

生きもの地球紀行

最近の話でいうと、つい先々週は湿地、湿原の話をやりにポナペというところに行ってきました。これは太平洋の真ん中の、北緯5.何度の、まさに赤道直下のマングローブのところから日本を見つめました。その前はニュージーランドの一番南の、人がだれも住んでいないスチュアート・アイランドというところに行って、西洋の人たちが森をどう考えているか、つまり、西洋の自然観というものをそこから伝えたことがあります。その前はマダガスカルでした。白い毛をした原始的なサルが横飛びをするんですが、ご覧になっていただけたと思います。うなずいていらっしやいますね。まさに進化の実験室といわれているマダガスカルから中継いたしました。

その前はオカヴァンゴ。これは南アフリカのすぐ上にありますボツワナ共和国にあるんですが、そこから大湿地帯の話をしました。日本列島がすっぽり入ってしまうようなカラハリ砂漠があります。その砂漠が半年に1回、突然、大氾濫を起こすという話をしました。川といっても、広渡川は太平洋に注ぐわけですが、海に注ぐ川ばかりではないですね。世界には砂漠に注ぐ川がいっぱいありますが、それをやりました。その川が突然オーバーフローして、今まで真っ茶色だった砂漠が突然青々とした草原に変わっていくんですが、そこにアフリカ中のいろいろな生き物たちが集まってきて、そこで子供を産み、育て、そして野火に追われるようにして半分ぐらいは死んでいくという、そういうすごい世界をやりました。つまり、1年に1回、大湿地帯がそこに現れるんです。そういうことをやってきた取材の一つの区切りとして、オカヴァンゴにも負けない大湿地帯が実はあるんだと。それは何かというと、田圃。世界に冠たる湿地の国、日本の田圃ですという話をしました。これはぼくの祈りですね。そういうことを考えながらいつもやっております。

日本の風景を見るときに、ぼくはいつも海外から見るようにしています。今度のポナペは初めて北半球、北緯5度の世界でしたが、今までは全部南半球から見てきました。南半球というのは、皆さん、お気づきでしょうか、よくも悪くも、全部の国が西洋に影響を受けた国です。先ほどいいましたマダガスカルはフランスの植民地でした。どういうことをやったかということ、徹底的に征伐をして、そして自分の美しい風景を作っていくというのが西洋のやり方です。別にけなしているわけではないんですが、よくも悪くもそういうことがとてもよく見えるのが南半球です。

飛べない鳥

例えばニュージーランド。あそこはすばらしいですね。美しい風景というのだいたい

ニュージーランドが出てきて、ガーデニングなどやっています。宮崎の知事さんともそんな話をしたこともありますけど、フラワーフェスティバルや緑のなんとかというときにはいつも教科書のようにするのがニュージーランド、その中でも特にクライストチャーチです。皆さんのイメージの中にも何かあるでしょう。緑の草原があって、すばらしく美しい町があって、そこではみんなそれぞれがニコニコしながら花を栽培して、すばらしい、美しい風景を作り出している。

実は、去年のちょうど今ごろですか、「世界の森」という番組を「生きもの地球紀行」スペシャルでニュージーランドから放送しました。ぼくはいつも日本、日本、日本といい、日本の田圃、そして小川、そして雑木林ということ、もういいよといわれるぐらいにぼくはテレビを通じてできるだけ柔らかく、できるだけ懐かしく語り続けていますが、森を語るときには日本からしないんです。

それはなぜかということ、かつてニュージーランドには飛べない鳥たちが 14 種類、学者によっては 15 種類という人もいますが、鳥であるにも関わらず飛べないんです。皆さんの知っている鳥の中ではキウイという鳥がいますね。羽根はあっても小さくて、くちばしが長くてミミズを食べています。ああいう鳥が 14、15 種類いたのですが、それが今、たった 5 種類しかいなくなりました。その中の二つはペンギンです。キガシラペンギンとフィヨルドランドペンギンです。なぜそんなことになってしまったのか。

かつてニュージーランドは全国土の 97% が森で、そこには鳥たちがいっぱいいました。そしてその鳥たちは、渡り鳥を別にして、ほとんどが飛べない鳥でした。なぜか。かつてニュージーランドの森というのは「ジュラシック・パーク」に出てくるような森でした。皆さんの周りにもたくさんあると思います。シダをもうちょっと大きくして木になったような、こんなに太いシダがいっぱい生えていました。花は、あることはあっても目立たなくて、いま私たちがガーデニングなどで作っている花とは違うものがあるだけです。そこは鳥たちの天国でした。なぜ天国かということ、天敵がいなかったからです。

かつて大きな大陸があったんですが、皆さんも学校で習ったと思いますけど、それが約 6000 万年前に一番右側がパカッと分かれて、そこでできたのがニュージーランドです。6000 万年前というとは哺乳類が出現したかしないかというときですし、出現していても非常に原始的なものですから、一番右側、つまりニュージーランドにはほ哺乳類がいなかったのです。そのために彼らは卵を食べられることも雛を食べられることもなく生きていけて、飛べない鳥がたくさんいたんです。

ちなみに、その次に分かれたところはオーストラリアです。そこにはほ哺乳類が出現していましたが、パカッと分かれたときはまだ非常に原始的なほ哺乳類でした。それがコアラとかカンガルーなどのお腹に袋のある有袋類です。

それからずっといろいろあって、最後にパカッと分かれたのがマダガスカルだったのです。そこではほ乳類がずっとずっと出てきて、原始的なサル、いわゆる原猿といわれるものです。さっきぼくがいました横飛びに飛ぶサルです。あれはなんで横飛びに飛ぶかという、あれは人間が飛ばしたのです。

マダガスカルは日本と同じぐらいの大きさをした、非常に大きな、アフリカ大陸のすぐ右側にある、空豆のような形をした島です。マンダレー川という南に流れている川があるんですが、そこは、ものすごい暑い乾燥地帯です。川の両脇だけは河畔林になって、帯のようにずっと林があるのですが、後は非常に乾燥地帯です。スパイニーフォレストといってとげとげの森があるんですが、ここだけは非常に豊かな、日本の雑木林のようなすばらしい森があって、この帯状のところにシュワカとかワオキツネザルとかアイアイとか、皆さんご存じのキツネザルの仲間たちがいます。チンパンジーとかそういう進化したサルはいなくて、一番原始的なサルたちです。

シュワカの話に戻って、なぜシュワカは横に飛ぶようになったかです。彼らはこの川のエを何十キロと、川の上流に行き下流に行き、行き来しながら生活をしていました。ところがそこへ畑がで、そして橋も架かり、そして人家、工場もできていった。その結果どうなるかという、これは世界的にそうなんですが、帯状の生息域がしま状になる。つまり、こちらのかたまり、こちらのかたまり、こちらのかたまりとずたずたに切られていきます。そしてそれがもっとずたずたにされていくと、今度は点、点、点、点と点状になるのです。

その結果、どういうことが起こるか。生きものたちにとって、特にほ乳類にとって、神が与えたもうた掟というものがある。絶対にやってはいけないという掟というのは近親交配です。自然の中で神の掟を破るのは人間の欲望だけだという学者もいます。人間の性欲というのは、本当に自分の一番近いところとでも近親交配してしまいますけど、ほかの生きものは絶対にしないのです。でも、ここには自分の家族しかいない。こちらには自分の家族以外のものが出て、そちらと交配したいのだけど、行かれない。ライオンなどでは雄は追い出すとか、種類によっては雌は必ず群から追い出すというようなことがありますけど、それはそういう掟なのです。

そこでどうしたかという、そちらの島に行くために、彼らは走ったのです。ただ、残念ながら骨盤が開いているから、人間のように二足歩行はできないのです。木の上で生活している生きものなので、カニのようにしか動けないから、だからこう飛んだというわけです。

今度はイギリスの話です。特に若い女性にはニュージーランドに対して憧れのようなものがあります。さっきいいましたけど、なぜそんなにたくさんの鳥たちや、たくさんのニュージーランドオリジナルの植物たちがいま壊滅的になってしまったのか。皆さんも物語で読んだことがあると思いますけど、キャプテン・クックという男がおりまして、今から約150年前にあそこに上陸しました。ニュージーランド自体は、それよりちょっ

と前に、ジーランドという、オランダかどこかの海賊みたいな人が発見したので新しいジーランド、ニュージーランドという名前をつけたらしいんですけど、キャプテンクックが150年前に上陸しました。

位置としては赤道を真ん中にしてパタンと折ると日本とちょうど合わさるぐらいで、面積は日本のだいたい7割ぐらいの国土ですけど、上陸したところがあまりにも素晴らしいので、ここにイギリス以上に美しいイギリスを作ろうと思って、それを国に帰っていろいろなエリートや学者たちに話をしたんです。

その結果、どういうことが起きたか。皆さんがご存じのクライストチャーチという名前は、実はオクスフォード大学にクライストチャーチ・カレッジという寮があって、頭脳も体力もすごく優秀な連中が家族を連れて入植したので、クライストチャーチという名前がついたのです。そしてその隣にはダニーディンという、これも美しい町があるのですが、ここにはスコットランドの超エリートたちが来ているというように、ほとんどの町にそういう名前がついています。

あまりにも一色の人間たちがいるということ。それも優秀という一色ですが、これは一番怖いですね。優秀という一色です。その結果、何をやったかということ、いま残っている森は全国土の20数%です。どこに残っているかということ、さっきいったキャプテン・クックから名前を取ったマウントクックなど、本当に開発不能のところ。そういうところにしか残っていないのです。

彼らは何をやったかということ、美しい風景を作ろうというので全部の木を倒して、そして全部の木の根っこも掘り出して、生きもののほとんどを征伐したのです。西洋の論理です。全部征伐して、そしてそこに自分たちの食べ物の、つまり肉ですが、ヒツジとウシと、それから彼らの文化といってもいいハンティングのためのシカを世界中から集めたんです。その中で一番人気があるのは日本のシカで、シカディアといいます。

つまり、自分たちのものの考え方、自分たちの感じ方、自分たちの哲学、宗教、それらを全部そこに持ち込んで、それに反するもの全部に1回ローラーをかけるという、この論理です。

さあ、やっと日本へ帰ってきますけど、そのときに私は本当に感謝と祈りを込めていったことがあります。彼らは肉を食べているけど、私たちはいい先人に恵まれた。つまり、私たちの先人は肉を食べるのではなくてお米を食べることを選んでくださった。それが日本の風景だということを語りたいし、ずっとずっと語り続けているのです。

先ほどのオカヴァンゴにしてもそうです。ものすごいドラマチックで、ある種ドラステックといってもいいぐらいの、そういう世界の湿地をずっとやってきたんですが、そのオカヴァンゴにも勝るとも劣らない、すばらしく管理された、すばらしくやさしい湿地が、実は私の側にあるのです。

それは、まさに広渡川の周りに広がる、水を張った田圃です。周りにいる生きとし生

けるものはみんな、広渡川では4月の上旬に水を張ってくれるんだということを知っている。それぞれの地方によって、今日は島根県からおいでの方もいらっしゃいますが、島根県でも5月の連休のときに、役場の方も県の職員の方もみんなその連休のときに田植えをする。それぞれの町で、それぞれの土地で田植えをする、つまり水を張ります。そうすると、そこへナマズがあがってきてそこで交尾をして、田圃というすばらしく豊かな湿地の中で子を産み、育てる。秋に水を落とすときになるとみんなが行く。

日本の美しい風景。先人たち、日本のご先祖さんたちが作ってきた風景。そこには田圃があって、春になると水を張ってくれるからずっと水を蓄えて、秋の刈り取りの時期になると必ず決まったように水を流すというように、何代も何代もそのようにしてきました。ですから日本の生きものたちはみんな田圃にいるわけです。田圃があるというのはどういうことかということ、そこに水を引いてくる小川があるということ。小川や田圃、唱歌、歌に歌われた風景です。

桜だってそうです。例えば吉野の桜は最近ちょっと元気がないですけど、あれにはきっと寿命というものもあるのでしょう。人々が祈りを込めて吉野にお参りするときに持って行って植えてきた桜。

桜のある風景、雑木林、里山、そして侵すべからざる水源の森。その間に、きっと先人たちがちょっとお借りしますよといいながら作ったのであろう、直系3メートル4メートルの田圃。それがオーバーフローしてその下にもう1枚田圃を作り、またもう1枚田圃を作りして作ってきた棚田。それで谷が迫ってくるとそれをまた川に戻し、そしてまたこうやっていく。

平野部に住んでいる方は皆さんおわかりでしょう。昔はみんな川が暴れまくったんです。南半球に行くとみんなそうですが、未開の地で1本の川が海にそそぎ込むなんていうことはないんです。編み目のようになって、荒れ果て、暴れ果てて海に注いでいきます。やまたのおろち伝説がそれですね。ちょっと小高いところから見ると、まるでヘビの鱗のように見えます。でも先人たちはそれと案配よく折り合いをつけながら田圃を1枚ずつ作って、そこで水を案配しながら、1本ないし2本にして穏やかに海に注いでくださいとお願いして、水の恵みをもろう、その風景です。日本の風景。

「生きもの地球紀行」の話になりますけど、日本の生きものというのは全部人間が案配よく作ってきたものです。いま世界的な問題になっている持続可能な開発というのがよくありますけど、まさに絵に描いたような風景というのが日本の風景と、日本の生きものたちと、そして日本人のものの考え方。

つまり、日本を考えてほしいのです。いかにぼくらがすばらしい先人に恵まれたか。いかにすばらしい知恵をぼくたちは受け継いでいるか。絶対に征伐をしないで、仲良く、案配よくやってきた。大なる生きものたちと植物たちと、それに抱かれた水とそれが通ってきた肥沃な大地。そうですね、去年も一昨年も、10年前も100年前も、きっとこの田圃は同じ稲を作っていましたね。同じ稲を作ってきたわけですが、そんな作物は世

界中にはないです。稲しかありません。

「生きもの地球紀行」という番組は、皆さんほとんどご存じないでしょうけれど、「グローバル・ファミリー」というタイトルで世界中に輸出しているんです。日本にはたくさんテレビ番組がありますが、ダントツ、トップで輸出されているのは「グローバル・ファミリー」、つまり「生きもの地球紀行」なのです。

ぼくたちは焦ってます。つまり、世界中の人たちが何を私たちに求めているのか。手前勝手の論理ではなくて、そんなことをしたら罰が当たりますよというぼくたちの論理。例えば一つの生きものをここで採りあげるとします。このあいだ撮ったのはオオムジアマツバメです。アルゼンチンとブラジルとパラグアイのちょうど国境に、乾燥地帯に高さ80メートル、幅4000メートルの大きな滝があって流れてきた川がドーンと落ちていくんですが、ここが岩盤ですから、周りにわき上がる水しぶきで熱帯雨林が出現するんです。滝ってすごいですね。上から降ってくる雨ではなくて、川がドーンと落ちていくその飛沫ですごいレインフォレストが形成されるんですが、そこに飛び込んでいく鳥がいるんです。それを見ていると、明らかにあいつは死んだというのがわかるんです。すごいですよ。それぐらいなのに、なぜ飛び込んでいくのか、それを撮影に行ったんです。

なぜ飛び込むのか。たった一つの理由は、自分の子孫を残すためなのです。この水のカーテンをくぐってしまえば、ほ乳類も来なければへびも来ないので、安全なのです。来られるようなところではないんです、われわれしか行かれないようなところですから、彼らしかいないんです。つまり、自分が死んでも、そこに巣を作り、子供を産み、育てると、確実に自分の巣が残せる。

そのときに何通かの反論の手紙をいただきましたけど、ぼくはあえてその現場から中継しました。生きものはなぜ生きているのか。理由はたった一つ、自分の子孫を残すためです。

世界から見た日本

先ほどいいましたけど、マダガスカルの子カメはなぜ横に飛ぶかというのと、より健やかな自分の子孫を残すために、地上を歩けない樹上生活者なのに、あちらの島に行くわけです。あちらの森へ、自分の子孫を残すために行くのです。つまり、血のはなれた雌と出会うために飛んでいくのです。

このあたりにはゲンジボタルがいっぱいいると思います。実は、去年ぼくがゲンジボタルの中継をしたのが隣の大分県からでした。大分県と宮崎県の県境にある傾山の麓に流れる白山川から中継しました。ホタルは私たちの祈りにも似たような生きものです。ホタルを見るとき、日本人は単なる虫とは絶対に考えないですね。ちょうど時期も時期ですから、ご先祖さんの思い、魂がそこに入っているように、そんなふうにしてぼくた

ちはホタルのラブコールを見えています。あれはラブコール、雌と雄が出会うための信号なんです、それをぼくらはいつも考えて、そして懐かしい思いをしながら見えています。ホタルを初めて見る子供であっても、懐かしいなと思うはず。それをDNAといいます。

フランス語でホタルは何というかというと、光るウジ虫といって、つまり虫けらなんです。イギリス人は虫をどう思うのか。ぼくにとってクワガタとかカブトムシは、自分が子供のときに遊んだスーパーヒーローです。でも、彼らはオオムジアマツバメも昆虫も全部解剖学的に観察をするだけです。

例えばカブトムシにしたってそうでしょう。きっと皆さんもカブトムシと遊んだはず。だからカブトムシが死んでいくときのあのふるえがわかるし、それだから命の痛みというものがあるんです。

ぼくらは、最初あいつと遊んでいます。こういうところにくっつけて引っぱろうとしても、強いですから絶対に離れません。実は去年、長崎田平町から「生きもの地球紀行・スペシャル」で中継しましたが、あいつの筋肉はすごく強いです。何日か遊びます。次の日も次の日ももっとおもしろい遊びをします。カブトムシ、いるかい、といって急いで帰ってきて遊んでいますけど、遊んでいるうちにだんだん力が弱くなってきて、あるときほとんどしがみつかなくなります。ぼくは2度ほど体験があります。おい、おいとつついても動かなくなります。死んじゃったのかなと思って持っている、最後にブルブルとふるえて、本当に死にます。ああ、死んだ。ぼくには殺すつもりは全然なかった。皆さんもたくさんの生きものを殺してきていると思うけど、トンボを殺すつもりはなくても、遊んでいるうちに死んでしまうんです。こんなに大きな生きものとこんなに小さな生きものが遊ぶんですから、当然小さな生きものは死んでいきます。あのふるえがどれだけわかっているか。

それが田圃です。田圃があって、小川があって、雑木林があって、その中でいろいろな生きものたちに遊んでもらって、そして今ぼくらがいる。そして八百万の神がいる。それぞれの川、それぞれの岩、それぞれの木、山、海に神が宿る。こんな原始的な宗教観を持っている国民は、少なくとも文明諸国では日本だけだと思います。それをやったら罰が当たるよと私たちは子どもの頃からいわれました。

つまり、たったホタル1匹。たったメダカ1匹。たった桜1本。たった稲穂1本。すべてのものに、こうやったら罰が当たるよとぼくたちは教えられてきました。それがお米を食べる、ご飯をいただく、おむすびをいただくという私たちの魂のような気がするんです。

そういう祈りを込めて生きものたちをのぞき見させてもらっているのが「生きもの地球紀行」です。そして、なぜ、こんなにわかりにくい日本のたたずまいを、いま世界中が理解してくれるようになったということを知り皆さんに報告したいと思います。

私がイギリス、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカといったと

ころに行くと、空港に降りた途端にインタビューを受けます。そして驚くべきことに、ニュージーランドに行きますと、きれいな日本語でインタビューを受けます。

どういふことをインタビューされるかという、「棚田って何ですか」、「柳生さんがいつもいっている里山とは何ですか」、「雑木林ってどんなものですか」、「小川ってどういふたたずまいなんですか」。つまり、日本の農業のある風景、お米を作っている風景、そしてご当地のようなすばらしい餌肥杉といったものを育てていらっしやる風景について、ぼくはいつもインタビューを受けるのです。

日本語でインタビューを受けるんです。いま私たちは、第一外国語として英語を習いますが、ニュージーランドの人たちの第一外国語はいま日本語なのです。皆さん、ご存じでしたでしょうか。みんなきれいな日本語をしゃべります。だから、いわゆる観光地などに行っても、おみやげ物売り場に行っても、みんなきれいな日本語で話をしてくれます。

なぜ日本語を習うのか。それは、太平洋経済圏の中で経済活動をするのに一番有利であるから。彼らは英語ができるわけですから、日本語を習っておいたほうがいいというのが一番の理由でしょうけど、もう一つのとても大きな理由は、日本に学ぼうとしているからです。いかんともしがたく征服し、荒らし果ててしまったニュージーランドの国土に、日本に習って、いま木を植えようとしているのです。驚くべき風景があります。ヘリコプターで飛んでいくつも見ました。

イギリスには木を植えるという習慣がありません。育む、育てるといふ習慣はないのです。

ところが、いま木を植え始めていて、そのためには小川を、そのためにはこれを、そのためにはどういふ植生がいいかということをやっているのです。

ぼくは、ナニーデンというところに一晩泊まったんですけど、いつもはテントに寝ているんだけど、そこではいいホテルに泊めてもらいました。そうしたらそこへ可愛い娘さんたちが 10 人程来ました。日本からの留学生です。その子たちが来たので、彼女たちに聞きました。どうだい、ニュージーランドはいいだろう、素敵だろうと。そうしたら 10 人が 10 人とも、早く日本へ帰りたいといふのです。ニュージーランドは嫌いなのかと聞くと、いや、そうじゃない。恥ずかしくてニュージーランドにいられないといふわけです。

例えば、私たちでもそうでした。私たちが若いころ、英語を習いたてのころにイギリス人やアメリカ人を見つけると、いっぱいいろんなことを聞きたがりました。電気冷蔵庫ってどんなのとかって。ベティさんの漫画を見ると、とてもじゃないけどすごい家族生活をしていました。ぼくらは映画で育った人間ですけど、映画で見るとものすごい生活をしていましたから、どんな生活なのか、いっぱい聞きたがりましたが、今、ニュージーランドが、まさに日本に対してそういうことを聞きたがっているわけです。

今日は責任ある立場にいらっしゃる方が多いと聞きました。小さい子供たちでさえそうなので、これからそういうところに視察に行ったりするときに、もう1回、自分の町や村や、そこにある風景、日本の風景をどうぞもう1回調べなおして行ってください。生きものの名前は全部知っているように。木の名前、草の名前、花の名前、チョウチョの名前、虫の名前をみんな知っているように。そして、かつてゲンジボタルはこうだったのに、今はこうだ、ということも語れるように。そしてもっとグローバルに、世界の共通語はたった一つ、エコロジーですから、それを語れるように。どうぞそういうふうになってください。

私の八ヶ岳

私は八ヶ岳の標高1350メートルのところで24年間、かみさんや子供やその友人たち、そして死んだ親父と一緒に森を作ってきました。なぜ八ヶ岳なのかというと、柳生家の家訓で、13歳になると旅に行けと、ほとんど無一文で家を追い出されるのです。柳生というのは、柳生十兵衛とか柳生但馬守といった人たちが私の遠いご先祖なんですけど、そういう家訓がありまして、最初に行ったのが八ヶ岳の南麓だったのです。

そこにぼくの木がたくさんあります。わが家には家訓でも掟でもないんですけど、教えとして、自分の木を持ちなさいというものがあります。自分の木です。ぼくはここに来たのは初めてですが、宮崎市にはぼくの木がありますし、行く先々にいろいろな木があります。

皆さんの周りを見回してください、日本の森は国の政策によって一色の森になってしまった時代があります。皆さんの周りですとスギでしょうか。まだまだスギの間にサクラが見えたり、ナラの木の銀色の新緑が見えたり、いろいろな雑木の色合いが見えるとはっとするんですが、ややもすると一色の森になってしまいました。皆さんの周りではスギ、ヒノキでしょう。

私の大事な大事な八ヶ岳南麓はカラマツ林になってしまいました。寒冷地にはスギ、ヒノキが植えられなくて、ひたすらカラマツを植えてしまったのです。信州大学の諸君といまだにずっとずっと研究しているのですが、カラマツ林の中を流れている川に魚はいません。なぜか。虫がないから。なぜか。砂漠とはいわないけれど、林床が土漠になっているからです。

つまり、日本の風景に一色というものは絶対にはないのです。それなのに、日本中があるときたった一つの価値を経済に求めた時代がありました。ついこのあいだまでそうでした。山を畏れをもって見ていた、畏れをもってつき合ってきた、そんなことをやったら罰が当たるよと親たちにいわれながら育ててきた森を木材工場と見立てた時代がありました。実は今それが、手入れが行き届かなくてきております。熊野古道を先日歩いたとき、スギ林は瓦礫になっていました。間伐をし、枝打ちをして自分の子や孫を育てるようにして育ててきたから、だから木の文化の国日本だったのです。

ご清聴、ありがとうございました。

これは、柳生博氏基調講演よりテープ起こしで作成されたものです。

サミット 討議

開会にあたって

【司会】 ただ今から「第 11 回さくらサミット in 北郷」サミット討議を始めさせていただきます。「人にやさしく、桜にやさしい環境づくり」をテーマに、全国 14 の自治体代表の皆様にごディスカッションしていただきます。



本日、コーディネーターを務めていただきますのは、自治省振興課長、岐阜県副知事、そして自治省消防庁次長などを歴任されまして、現在は救急振興財団副理事長でいらっしゃいます篠田伸夫様です。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに～環境基本計画とピオトープ～

【篠田】 皆さん、大変お待たせをいたしました。今日のテーマは大変素敵な、「人にやさしく、桜にやさしい環境づくり」ということでございます。われわれ役人、あるいは役人に近い方といろいろいらっしゃいますが、イマジネーション豊かなサミットにできればいいなと思っております。

いま私ども日本は 2 度目の環境問題に直面しているといってもいいかと思えます。1 度目は、いうまでもありません、高度経済成長期にわれわれは直面いたしまして、公害という名の環境問題に直面したわけでありまして。しかしこの公害につきましても、いろいろな方々の努力によりまして、だいたい昭和 50 年代の半ばまでに顕著な成果をあげたといってもいいかと思えます。もちろん今でも地域地域においては公害がなくなったわけではありませんが、日本全体としてみたら、昭和 50 年代の半ばごろまでに顕著な成果をあげたといってもいいかと思えます。

そうして、今再び新たな環境問題が日本に襲ってきていると思えます。その環境問題の名前は地球環境問題というものでございます。

従来、先ほどいいましたように、われわれは環境問題といいますが、身近な、地域における公害だとか自然保護といった問題についていろいろ議論しておったように思います。しかし、今われわれが直面している環境問題というのはそういうものではなくて、私どもが日ごろ通常の生活をしている社会経済活動に伴って、環境に対して非常に大きな負荷を与えていて、それが大きな問題になってきているような状況でございます。そして、そのことによって社会そのものの持続可能性というものが低下してきているという、このことが非常に懸念されているというのが今の状況かと思えます。

そういう点では、われわれの身の回りの小さな地域を越えて、普段の生活が環境問題

につながっているというところに大きな問題があると思うのです。しかも、世界的な人口拡大だとか、あるいは経済社会活動の拡大ということによりまして、人類の生存基盤である地球環境そのものが損なわれるのではないかというおそれが出てきているということも、皆さん、ご承知のとおりであります。環境問題というものを地球的規模で考えていかなければいけないという時期に来ているということでございます。

環境基本計画～4つのキーワード～

この地球環境問題につきましては、皆さんもすでにご案内のとおり、1992年にブラジルのリオデジャネイロにおきまして国際環境開発会議というものが開催されました。そこにおいて一つの国際的な合意がなされたのは皆さんもご存知のとおりですが、持続可能な開発、サステイナブル・デベロップメントということが人類共通のゴールであるということが世界の国々によって確認されたわけでございます。

わが国、日本におきまして、この国際環境開発会議の成果を踏まえて、平成5年に環境基本法というものが制定されました。従来ございました公害対策基本法というものはそれによって廃止され、こちらのほうに吸収されたというようなかたちになっておりますが、平成5年に環境基本法が制定され、さらに平成6年には環境基本計画が策定されたわけでございます。

今日、私は来る前に家で朝日新聞を読んできましたら、環境基本計画を見直さなくてはならない。現在の環境基本計画というものは、いろいろな政策が羅列されているけれども、到達点というか時間的な管理というか、そういうことが欠けているので見直しを図らなくてはならないということが書かれておりましたが、平成6年にそういう環境基本計画が策定されたわけでありませう。

その計画は皆さん方もご覧になったかと思いますが、四つのキーワードがそこに載っております。一つは循環でございます。いうならば、環境への負荷をできる限り少なくして、循環を基調とする経済社会システムというものを実現しようではないかという観点から、循環という言葉がキーワードとして出ております。二つ目は共生であります。健全な生態系を維持し、回復して、人間と自然との共生を確保していこうという観点から、共生というものが二つ目のキーワードとして出ております。

そのような循環型の社会、あるいは自然と共生する社会というものを実現するためにはあらゆる主体が参加しなくてはならないということで、三つ目のキーワードとして参加というものが出ております。そして四つ目のキーワードですが、先ほど申しましたように、地球環境問題は地球的な規模で考えていかななくてはならないということで、国際的な取り組みというものが四つ目のキーワードでございます。こういう循環、共生、参加、国際的取り組みというキーワードでこの環境基本計画は作られております。

今日は地方公共団体の首長さん方、あるいは関係の皆さん方がこうして一堂に会して

いるわけですが、まさにこの 3 番目のキーワードである参加という観点から今日のサミットは行われているのではなからうかということで、そういう点では大変時代になつたサミットとして評価されるのではないかと思います。

一方わが国は、先ほど申しましたように、昭和 50 年代の半ばごろに公害というものを克服したというか、公害の克服に顕著な成果を上げたわけではありますが、そういう時代から以降、われわれの意識の中には、良好な環境の中でゆとりと潤いのある生活をしたいという考えが非常に強く出てきているというふうにいわれております。いわれているというか、自分自身の気持ちを考えてみれば、まさにそういうふうなゆとりと潤いというものを求めているといえ、そうだと皆さんも同感をされるかと思います。

そういう一つの表れとして緑化というものがありません。今までも、昭和 50 年代の後半以降、あるいはその前から、緑化ということには取り組まれております。先ほど申しました環境基本計画というものを読んでおりますと、緑化という言葉がかなりいろいろなところに位置づけられておまして、やはり緑化というものが非常に大きな意味を持っているということがわかります。今日も環境問題とともに緑化ということを皆さんと語っていくわけではありますが、この緑化についてのいろいろなご意見を賜りたいと思います。

ビオトープ

ところで、先ほどの柳生さんの話の中にも出ておりましたが、生きものの立場からものを見るということが従来欠けていたのではないかと。生きものの身になってもの考えるということが、いま必要なのではないかとことをいっておられました。あるいは、ニュージーランドは大変緑がきれいな街であるが、それはしかし、人間にとってきれいな緑なのだというふうなお話でございました。緑化ということは非常に重要なわけですが、はたして緑というものはイコール自然、自然といえれば緑というふうな考え方をしていいのかどうかという問題が近年出ております。

ビオトープという言葉がございます。それは野生動植物の生息空間というものを意味する生態学の用語のようではありますが、自然との共生といったときに、どうも今までは人間の立場から見た自然という色彩が強すぎたのではないかと。むしろ、生きものの立場から見ていくという考え方が必要なのではないかとということで、特にドイツあたりでこのビオトープというものの考え方が出てきたようであります。

そして、過日、これも新聞を読んでおりましたら、アメリカにおいて自然破壊の代償行為として、ある政策が行われていると書いてありました。公共事業をやることによって自然を破壊してしまった場合には、ほかのところに自然を作ることによってそれをプラスマイナスゼロにする。そういう差し引きゼロの政策をノーネット・ロスというので、いうならばビオトープと同じような考え方ですが、こういうことがアメリカで最近なされて、本来の自然の復元に力を入れているということが報告されておりました。そ

ういうふうな新たな流れもあるということをご皆さんにとりあえず報告しておきたいと思
います。

これからサミットが始まるわけですが、今日の進め方は3回に分けて、まず問題
提起をある自治体にやっていただきます。そして、その問題提起の発表を受けまして、
ここに座っていらっしゃいます各首長の方々、あるいはフロアにいらっしゃいます皆さ
んのほうからいろいろなご意見やご質問等を受けるというかたちで進めていこうと思っ
ております。

今日の1番バッターは上越市さんで、後ほど詳しくお話がありますが、ISO14001
ということについて発表がございます。それはいったい何かということについて詳しく
発表がございます。上越市の発表を巡るディスカッションが終わった後、2番バッター
として鬼石町と日立市さんのほうから、環境対策として大変素敵で多彩な取り組みをな
さっておりますので、その報告をしていただいて、さらにディスカッションをする。最
後に、地元北郷町のほうから発表を受けてディスカッションをする。こういうかたちで
進めてまいりたいと思っております。先ほど申しましたように、フロアにいらっしゃい
ます皆さんのほうからのご質問やご意見も受けることにしておりますので、よろしくご
協力のほどをお願いいたします。

それでは早速でございますが、まず1番バッターとして上越市の藤原助役さんのほう
から「ISO14001の取得と環境対策への取り組み」ということでご発表をお願いいた
したいと思います。よろしくお願いたします。

各自治体の紹介～新潟県 上越市～

【上越市・藤原】上越市の藤原でございます。上越市は平成9年にさくらサミットを開催
させていただきました。北郷町さんからもご出席いただきまして、ありがとうございました。

本日、上越市の市長は、FM放送の開局に当たっておりますのと、成人式をしており
ますのと、もう一つ、高田城100万人観桜会の開催と公務が重なりましたので私が代理
で出席させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

ISO14001とはということからお話をさせていただきたいと思っております。今ほど、コ
ーディネーターの篠田様から環境問題についてのお話ございました。環境問題は現在、
地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、森林の減少など、これらは全部国境を越えた問
題ではありますが、私たちの日常的な問題でもあることから、上越市ではこの重要施策
を市の対策として位置づけました。

今日はまずISOとはということをお話しさせていただいて、認証取得の経緯とその
目的、環境対策の推進と具体的な取り組み状況、4番目に緑化への取り組み状況、5番
目に環境問題取り組みへの評価と効果、そして最後に今後の取り組みという順序でお話

をさせていただきたいと思います。

私は今日この会に出席させていただくにあたりまして、昨日の 7 時 50 分に上越を発いたしました。途中、新幹線に乗ってまいりましたので越後湯沢を通りましたときに、雪がいっぱい降っておりました。積もっているのではなくて、雪が降っていたのです。そして宮崎空港に降りましたときには、まさに春らんまんという感じがございました。それから宮崎神宮へお参りをさせていただいて、緑化フェアのほうを回り、こちらに昨日の 4 時過ぎに到着いたしました。

先ほどは柳生先生のお話を本当に感銘深く聞かせていただきましたが、そのいくつかは私の心にふるさとへという感じを持ちました。昨日、宮崎神宮にお参りさせていただきましたら、そこにはすばらしく大きいケヤキの木がずっと並んでおりまして、そこに緑が輝いた感じで新芽が出ておりました。そちらの参道を歩いていくと森の香りがいっぱいして、上手に鳴けるようになったウグイスの声に迎えられて、いやあ、すばらしい、うれしいなと思いました。次に緑化フェアのほうに行きましたら、ランがメインパークのようなところにたくさんありましたし、また、このホテルに入ったときにもエビネがございました。なんとまあ、本当にうれしいこと続きだと思ったのです。

今朝の食事時間は 3 階の 1 番テーブルについたのですが、そこから見た景色というのが、なにかふるさとへ帰ったようなというか、何重にも重なった山並みがあり、その下に街が続いておりました。ところどころから煙が立ち上っていたのですが、それが風がなくてまっすぐに立ち上っていますし、早苗田というのでしょうか、田植えが済んだ緑があって、なにか心のふるさとに帰ったようなすばらしいところだ、いいなと思って、本当に感激続きであります。1 番テーブルでございますので、そこから覗いていただくと感激が新たになります。

ISO14001 の認証取得

本題に入りたいと思います。ISO14001 に取り組むことを積極的に進めるために、最初に ISO14001 とは何かということをお話しさせていただきたいと思います。上越市は昨年 2 月 24 日に、全国 670 市の中で初めて ISO14001 を取得させていただきました。これは国際規格でありまして、事業所単位として環境に関する方針、目標を作成し、その具体化のための組織や責任、プロセスなどの基準を定めたものがこの ISO というものでございまして、計画、実施、運用、点検、是正、見直しというふうに、一連のサークルの中で改善していくことが求められております。昨年 2 月 24 日に取得いたしましたして、去る 2 月 4 日、5 日の 2 日間に、認証 1 年ということで認証機関から定期監査が実施されましたが、総合評価で「向上」と位置づけられ、引き続き認証取得が認められました。

2 番目に ISO14001 の認証取得の経緯とその目的についてお話しさせていただきます。なぜ、この国際規格を取るようになったかでございます。皆さんのお手元に配られ

ております資料の2ページをご覧くださいますと、「のびやか」プラン」と書かれております。のびやか」プランの」は上越の頭文字の」と、もう一つは」OYから取ったものでございます。「のびやか」プラン」は今後30年、1996年から2026年までの30年の超長期のまちづくりプランを、平成8年8月に市民147人の参加で策定いたしました。

そこに書いてありますように、現在の人口は13万強、最近の新しいところでは13万4000人でございます。その13万人の人口から、30万都市機能を備えた緑の生活快適都市上越が将来都市像として掲げられております。目指すところとは、人・環境・まちづくりが基本理念です。住む人たちが美しい緑の自然と共生しながら、質の高い生活水準と文化を築き、地域社会の豊かさや快適さを創造していくことであります。

これの実現のために、平成8年の10月に上越市環境基本条例を施行しまして、環境保全についての基本理念として三つ挙げております。一つ目が人と自然の共生。2番目はすべての人の公平な役割分担。3番目に地球環境保全の積極的な推進。この三つを定めました。ここで繰り返し申しあげたいのは、行政と事業者、市民、この責任を明らかにして、環境保全に関する施策の基本となる事項を定めたということです。

ISO14001の認証取得の意思決定宣言について申しあげます。こういう長期プランの策定、条例の制定を終えた後、今からちょうど2年前になりますが、平成9年4月に、上越市では市として初めての国際会議を持ちました。ワールド・パートナーシップ・フォーラム上越というもので、中国、フランス、オランダなど17か国の大使等をお迎えして開催いたしました。

この会議は、日本国際問題研究所が平成4年から外務省の支援を受けて実施しているものです。フォーラムのテーマは、この年が地球温暖化防止京都会議の開催など地球環境年に当たっておりましたので「環境保全と開発」とされまして、上越市からは市長が出まして、歴史、文化の香る環境都市上越ということをテーマとした地方からのプレゼンテーションを行ったのですが、この際に、環境に対する具体的な方針としてISO14001の認証取得を宣言したわけです。

この宣言後、直ちに、5月26日に8人体制でプロジェクトチームを設置して、昨年2月24日に認証を取得いたしました。以上がいきさつでございます。

もう一つ、一方では、上越では昭和61年に行政改革大綱を策定以来、行政改革に取り組んでおりましたが、それから9年たちまして、平成6年に見直し政策課という課を設置して、事業全般の見直し、総点検に入っておりました。その結果、効果的、効率的な事業を行うために目的、目標を定めて、それを実践するための組織、責任、手順などの基準を定め、その進行を科学的に管理するために継続的な改善ができるシステムを築く必要があることを明らかにいたしました。

環境施策を実践するために構築する環境マネジメントシステムはまさに科学的事務管理システムでありまして、両者がちょうどうまくかみ合うことになったのであります。

ISO14001 の認証取得は環境施策の推進だけではなく、行政の刷新、地方分権、地方の時代に通じるものであると現在、考えております。

その認証取得の目的を要約いたしますと、環境問題への取り組みをまず行政が積極的に進める。市民意識の向上を図り、率先垂範の役割をはたす。2 番目に、今後の上越市の環境行政を世界のだれの目にもはっきりわかるという国際基準に則って進めていくということ。3 番目は、地方分権の時代において主体的な能力を高めながら経営感覚を持ち、常に科学的な進行管理をしながら、優れた行政サービスを行う必要がある。これら三つにまとめることができたと考えております。

現在の環境事業と 21 世紀に向けて

3 番目に、環境対策の推進と具体的な取り組みとしまして、平成 10 年、昨年を環境行動元年と位置づけたのですが、この環境問題の克服については市民、事業者、行政が一体となって取り組むことが大切と考えております。最初はまず行政が率先垂範していきこうと、自らの決意を明確にいたしまして、その後、啓発に取り組んでまいります。主な事業として何をしたかともうしますと、まず最初に地球環境シンポジウムを開催いたしまして、そこで上越市環境大賞を創設いたしました。これは事業者、市民の活動を支援するとともに、広く発表するための表彰です。これは表彰のための表彰ではなくて、広く発表するための表彰として位置づけております。次に、地球環境都市宣言を昨年 6 月 29 日に行いました。これまでも横浜、東京都新宿区などでも行っておいでです。

主な事業の二つ目は、環境保全設備に対する補助制度の創設です。これにはいくつかあるのですが、電動生ゴミ処理機購入をした場合に、購入費の 2 分の 1、これは 3 万円を限度としておりますが補助するというので、平成 10 年度から 1500 機分として 4500 万ほど予算化いたしました。低公害車の購入については、一般車との差額の 2 分の 1、これは 30 万円を限度としておりますが、これを補助するというので、平成 10 年度から 20 台分の補助を考えております。三つ目は風力発電装置の積極的導入です。平成 10 年度は 1 年間かけて風力調査をいたしましたが、直江津港の隣接地に 200 世帯分に相当する 600 キロワット / アワーの風力発電を 2 基、今年度と来年度に設置する予定でございます。

4 番目が市民の森整備事業です。市内にはたくさんの神社、寺を持っております。寺町ともうしますところには 670 いくつのお寺を持っておりますので、そういう市内の神社やお寺の樹木、山間地の森林を市民参加で守り、育むための構想を策定しました。5 番目に環境植物のケナフを試験植栽いたしました。ケナフは、ご存じのように、森林の 2 から 5 倍の二酸化炭素の吸収力があるという木で、1 年で大きくなるものですが、これは紙資源としても注目されております。平成 10 年、昨年は約 0.2 ヘクタールで試験栽植いたしまして、紙を作りました。和紙のような肌触りの紙ができております。これは余談ですが、この紙に絵を描きますと、下手でもとても上手に見えるような紙でした。

6 番目は事業者の ISO14001 認証取得費用の補助です。市内の事業所の認証取得費用の 3 分の 1 以内で、補助は 50 万円を限度といたします。こういう具体的なものに取り組んでいるのですが、そのほかにもいろいろございますので、どうぞお手元の資料をご覧ください。

4 番目の、緑化への取り組みは積極的に進めておりますが、1 万本の桜が咲き誇るまちづくりの推進として、高田城跡の公園のサクラは現在 3400 本のソメイヨシノでございます。明後日あたりがちょうどいい開化になると思うのですが、公園一帯を 1 万本の桜で埋め尽くして、上越市を桜の都にする計画に取り組んでおります。平成 10 年には 8809 本が植樹されました。

組織のほうですが、花と緑のまちづくり協議会という組織がございます。この組織と一緒に、町内会で植樹をする場合、あるいは新築をした家庭への記念樹として、市の木と花は桜と椿ですので、この桜と椿の贈呈を行っておりまして、去年は 2090 本の桜の苗木が植樹がされております。

5 番目に、環境問題取り組みへの評価と効果について申し上げます。上越市の取り組みが評価されて、平成 10 年、昨年 4 月に第 7 回地球環境大賞の優秀地方自治体賞をドイツのフライブルク市とともに受賞いたしました。この地球環境大賞は、地球環境の保全と経済成長の両立を目指して平成 3 年に国際自然保護基金日本委員会の特別なお協力と通商産業省、環境庁、科学技術庁などが後援して創設されたものでございます。

先ほどご紹介していただきましたが、ISO の認証を取得しましてから、平成 11 年、今年の 3 月 15 日までで照会件数は 1357 件、ご来町いただきました視察が 256 件、831 人の皆様におみえいただきました。

市の総合的評価としましては、都市の住み良さについて、東洋経済新報社発行の 99 年版『都市データパック』で安心度、利便度、快適度の比較で上越市は全国の 17 位にランキングされました。さらに、98 年日本経済新聞社の行政改革進捗度ランキングでは ISO 取得、全国規模でのランの実施などを評価していただきましたので、効率化、活性化で全国 1 位にランキングされました。

最後、6 番目に、ISO14001 認証取得の状況です。平成 11 年 3 月 1 日には、上越市においでになった自治体を含めて 14 の自治体が取得なさっております。また、上越市内では、現在、市役所、事業所など 4 団体が取得いたしました。事業所についてはほとんどが大企業でございますが、今後は中小企業の取得を期待して、応援いたします。

今後の取り組みですが、去年は行政が率先垂範してやってまいりましたが、2 年目の平成 11 年は市民、事業者に重点を置いていきたいと考えております。事業所についてはグリーン調達、あるいは ISO そのものの普及について指導や支援を行います。

問題は市民だと思っております。平成 9 年から市民オブザーバー会議、美しいまちづくり環境モニター制度を導入いたしました。今後も行政の考えをできるだけオープン

にして市民の関心を高めていきたいと考えております。市民啓発としては環境教育が重要になってくるものと考えておりますので、その主な事業として、市民版のISOの策定調査をいたします。ミニ太陽光発電システムの貸し出しをいたします。自転車のサイクルタウン整備構想を策定いたします。4 番目にパーク・アンド・バスライドということで自転車の駐車場を作ります。5 番目に市民ゴミ憲章を制定いたします。6 番目に地球環境パスポートを発行しました。7 番目に緑の基金条例を制定いたします。8 番目に、空き校舎を利用して、地球環境学校の整備をいたします。これらについてもパンフを見ていただきたいと思います。

21 世紀を目前にした現在、環境問題こそ地方自治体が積極的に取り組むべき行政課題であると考えております。今日、サミットに参加されました市町村の皆様からのご意見を拝聴いたしまして、今後の取り組みの参考とさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

ディスカッション ～ISO の取得と諸問題～

【篠田】ありがとうございました。ISO14001 の中身について、皆さん方にご理解いただけたかと思っております。全国の自治体で一番最初にISO14001 を取得したのは千葉県の白井町という町の様です。なにも、上越市さんのような大きな市ではなくて、町でもすでに取得しているところがあるということでございます。

さて、壇上の皆さんから、あるいはフロアの皆さんのほうから、ただ今の発表についてご質問、ご意見等をうかがいたいと思っております。どなたからでも結構でございますので、よろしくお願いいたします。こういうのは一番最初がいいにくいんですが、どなたか、素朴な質問でも結構でございますので、いらっしゃいませんか。後から意見を発表されますが、同じ市ということで、例えば日立市さんあたりは今の上越市さんの発表をお聞きになってご感想とか何かございませんか。

【日立市・吉成】今お話を聞いた中に風力発電の話が出ました。私も出雲に行ったときに見てきて、大変なお金がかかるけれども、しかし自然を愛し、環境破壊を防止するという意味で大変有意義だと思えました。今度2 基作られるという話でしたが、発電した電力は具体的にどういう使い方をされるのかを聞き漏らしたのですが、公共施設なのか、あるいは周辺地域の施設の使うのか、そのあたりをお聞かせください。

【上越市・藤原】今のところはそうたくさん売電するぐらいの電力はないと思っておりますので、先ほど申しあげましたように、200 世帯ぐらいの電力分ぐらいになると思っております。今あちこちで作っておいでですが、やはり騒音の問題やいろいろございますので、そういうことも考慮に入れなければなりませんし、あるいは1 年間の風の調査をいたします。私どもは港を持っておりますので、港に近いところに設置する予定でございますが、売るところまで、売電まで持って行くにはもうちょっとたくさん設置しなければならないのではないかと考えております。

【大村市・島】大村市です。人口が 8 万 3000 で、13 万まではちょっと及ばないのですが、開発と自然環境の保全ということが非常に問題になっております。上越市さんの場合、ISO 14001 を取ろうとされた本当のきっかけは何だったのでしょうか。それから、それをやられて 1 年たったわけですが、市民の意識というのはいぶん変わられたのか。そしてまた、具体的に河川の汚れだとか自然破壊といったものがそれで効果をあげて抑止されているのか。こういったことについてはいかがでしょうか。

【上越市・藤原】最初に取り組んだ具体的なきっかけは、市長が京都会議に出たということが最初のきっかけでございました。その後、すぐに初めての国際会議を開いたのですが、ちょうど世界もその問題に取り組んでいたということでもあります。

それから、市民の意識がどう変わったかともうしますと、取り組んだ一番最初は、私も ISO なるものが何だかもわからないで取り組んだのですが、トップダウンでまいりました。まさにトップダウンで動き始めたのですが、市の職員はわりに早く動き始められたと思っております。一月たたないうちに組織を作り、動き出したのですが、試行錯誤の連続でございました。

そういうなかで、ゴミの問題については、ゼロエミッションに取り組んでゴミが減ったと申しあげたいところなのですが、なかなか大変なところでございました。今はちょうどお花見の最中で、100 万人の観桜会にはたくさんの方におみえいただきますが、一番大変なのはお花見の後、あるいはお花見の最中のゴミとトイレの問題です。

ゴミは今 11 に分別しておりますが、少しずつ定着はしてきていると思います。まず本当に身近なところでは、透き通るゴミの袋に入れて回収をするということが、思っていたより早くできました。その前は黒くても、どんな袋でもよかったのですが、今は透き通って中身が見えるようなものにするという取り組みをしております、わりにすんなり入りました。11 に分けるというのは難しいのですが、これも資源回収、ゼロのゴミということで取り組んでおります。

まさに市民の意識というのが一番大変であり、いちばん大事なものだという視点を一番最初に持っておりました。13 万都市の 147 人ですから大きい数字なのですが、147 人の市民が入って作った J プランでございました。もちろん、ときどきに見直しをかけてまいりますが、そのときにも多くの市民が入っております。

そのほかに、最近の上越市としてのいろいろな委員会にも市民に公募という格好で委員に入ってもらっております。市民参加が、まず最初にあって、こういう動きをしたらどうだろうということでもまず評価をする。効果を出して評価をするというところで意識を一致させるというところから動いていきたいと思っております。

【北区・中澤】北区です。全市あげて環境問題に取り組んでおられる ISO 14001 のお話に関心を持って聞かせていただきました。先ほどの篠田先生のお話の中でも、環境基本計画では循環を基調にというお話がございました。これからは循環社会というなかで課

題は多いかと思いますが、今お話があった中には生ゴミ処理機を購入されたというわけですが、その生ゴミ処理機を購入されて、例えばそれを有機飼料としてお使いになるのかどうかということについて、お話をうかがえればと思います。

【上越市・藤原】生ゴミ処理機については、実は私どもが考えていた時点ではこんなにたくさん補助金を出さなければいけなくなるとは考えておりませんでした。予想に反してたくさん申し込みがあったので、うれしい悲鳴ではございました。

上越市というのは人口13万が広いところに住んでおります。まだ高層住宅もあまりございませんで、土地にはわりに余裕がありますので、利用されております。生ゴミ機を使いますとゴミの量がうんと減ってまいります。ただ、これからみんなが生ゴミ機を使用するようになれば、その配分の仕方ともうしまししょうか、そういうものもみんな考えていきたいと思っております。

その中の一つとしまして、環境学校もございまして、リフレッシュビレッジという動きを今しております。たくさんの方の市民の方においでいただいて農園のようなものを作ろうかということです。これも市民の発想の中から出たものなのですが、そういうところでもこれを飼料として使えないかということも考えております。

【角館町・黒坂】秋田の角館からまいりました。町長が所用で出られないものですから、桜を担当している私がまいったわけでございます。今の上越市さんのご説明について質問をさせていただきたいと思っております。

先ほどいかがかと1万本の桜を植栽するというお話でございましたが、それは上越の公園としてでしょうか、それとも市全体として1万本植えるのでしょうか、そのへんをお聞きしたいと思います。上越市の公園を私も見せていただいたのですが、私が見た感じでは今でもかなり密植のような感じがするのですが、そのへんについてお願いできればと思います。

【上越市・藤原】後ろのほうが聞こえなかったのですが。

【篠田】1万本の桜が植えられる予定のようなのですが、あれは大変密植ですね。1か所に非常にたくさん植えているというふうに思われますけど、どうなんだろうという質問です。

【上越市・藤原】市全体としてなのですが、主に公園を中心として植えてまいりたいということです。桜の種類は、春日山城のようなところでは、守る会のほうから桜の種類をヤマザクラにしてほしいとか、あるいはどこどこはこういう桜がいいとか、いろいろご意見をいただいておりますので、これも相談しながら植えてまいります。今、お城のほとんどはソメイヨシノでございます。密植にはならないように、樹木医もおいでになりますし、自然を守る会の方たちとも相談しながら、樹木医とも相談しながらやってまいります。

【角館町・黒坂】これは私どもの失敗談なのですが、桜というのは、私もいろいろ自分でやっているんですけど、密植するとお互いに競い合っ上るほうにばかり伸びてしまい

ます。苗木のときはちょっと寂しいですけど、かなり時間をとらないと上のほうにばかり伸びてしまいます。そして、ソメイヨシノにはテングスが付くんですが、これが非常に厄介でなかなか取れません。まして、山の斜面などにソメイヨシノがあると、テングスが付いたときに取れなくなってしまいます。木が小さいときはいいんですけど、そういったことがありますので、余談ですけど、皆さんの参考になればと思います。

【上越市・藤原】ありがとうございました。

【篠田】ご本人が樹木医さんですから、大変専門的に、ご親切に教えていただきました。ありがとうございました。会場のほうからどなたか、ぜひともという方はいらっしゃいませんか。

【参加住民】上越市でISO14001を取得されたということで、非常に努力されたのではないかと考えております。私たちは去年末にISO9001を取得したわけですが、取得するまでの準備には2年間ぐらいかかりました。今後は14001を取得せざるを得ないのではないかと今考えているわけですが、上越市では2月末までに4件の申請があるということですが、今後、そういう事業所が増える方向にあるのか。また、この補助金については増額される考えがあるのか、お聞きしたいと思います。

【上越市・藤原】増えると思いますし、増えるようにしていきたいと考えております。補助金は現在はこのくらいではないかと考えております。

先ほど申しましたように、今までに取ったところは大企業だけでございます。現在、取り組んでいるところが上越市内で数か所ございますので、今年取れるか来年取れるかわかりませんが、援助していきたいと考えております。

それからお隣の県ですけれど、地方銀行で3月に取られところがございました。銀行の名前をいいますと、長野県の八十二銀行というところが14001を取られましたら、市内の銀行がだいぶ刺激を受けまして、内々に取り組むということをお話しておりました。そういう刺激を受けたところがあちこちにありますので、取るところはいくつか出てくると思っております。

【篠田】町長さんにご質問がございましたが、それは役所でゆっくりとお話してみたいということのようでもありますので、ここではとりあえず発言は控えるということのようです。よろしく願いいたします。そのほかにもございませんでしょうか。

私から若干ご質問をさせてもらいたいと思います。市民の参加ということが非常に重要だというお話で、まったくそのとおりだと思っておりますが、そういう場合に、例えば自治会だとか町内会というコミュニティをどううまく使うかということがポイントなのではないかという感じが私はするので、先ほどの市民参加の147人というのはどういう母体で出た人なのか。あるいは、自治会や町内会というのがどのような参画の仕方をしていっているのかというあたりを教えていただければと思います。

【上越市・藤原】町内会は330ちょっとございまして、それぞれが町内会長を持ってお

りますが、広報や、あるいはいろいろなお知らせは全部町内会長を通じて、週 1 回ずつ出ております。147 人の母体ですが、上越市は常に委員会を作るときに公募いたしますので、公募と、それから町内会の推薦と両方ございました。

【篠田】わかりました。本当は皆さんももっともってお聞きしたことがあろうかと思うのですが、上越市さんばかりをやっていると時間を食ってしまいますので、後ほどまた時間があればおたずねしていただくということで、2 番目のほうに移りたいと思います。

最初に鬼石町の関口町長さんから、鬼石町で取り組んでおられるいろいろな環境対策についてのご報告をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

各自治体の紹介～群馬県 鬼石町～

【鬼石町・関口】鬼石町の関口茂樹でございます。鬼石町は群馬県の南西に位置しておりまして、52 平方キロの山間の小さな町です。群馬県は下流が埼玉県、東京というわけで、首都圏の水瓶的な機能を負ってまいりました。鬼石町にも 1 億 3000 万トン貯水する下久保ダムという大きなダムを持っております。これができたのが昭和 43 年でありまして、東京都に一番近いところに大きなダムがあるということで、水飢饉などのときもいちばん最後まで取っておいて、最後に調整をするというふうに使っているようです。

そういうような関係で、かつて私たちは川で上級生と遊んだり下級生と遊んだり、運動もそうですけどいろいろなことを教えてもらったりいたしました。遊びの場であったり教育の場であったり、また体育の場であったりした川でありましたが、ダムができると川というのではなくて水を下流に送り込むだけの水路になります。大きな役割を果たすのではありますが、ダムの建設ということはこれまた川の生態系、本来の川の性格を根底からだめにしてしまうということでもあります。

そういうことで、ダムのいいところもありますが、自然に対しては破壊的な結果を及ぼすということも骨の髄まで染みわたっているという町でありますから、町民は、ダムといえ、それはないほうがいい、それは作らせるべきではないというのが私たちの町では常識であります。

そういう中で、先ほど申しあげましたダムは神流川、神様が流れる川と書く利根川の支流なのですが、この神流川のまた支流に、唯一の清流である、三つの波の川と書く三波川があります。この川こそしっかり守って次の世代に引き渡そうということで、町民が先頭に立って、今この川に石を戻しております。鬼石町は造園の町ということで、川にすばらしい石があったものをほとんど揚げてしまったのですが、今は石を川に戻す運動が町民の間からわき上がっておりまして、年に何十トンという石を川に戻しております。かつての川の姿を少しでも復活させようという運動に非常に大きな関心が集まり、取り組んでおります。

環境事業とダイオキシン

また、ゴミの問題につきましては、鬼石町はこの4月からRDFが稼働いたしました。リサイクルセンターとともにごみを減量化し、そしてできるだけ資源化し、リサイクルを行っていかうということでもあります。群馬県には70市町村ありますが、実際の稼働を始めたのは鬼石町が第3番目ではないかと思えます。群馬県では70市町村のうち、約1割近くが近々にRDFでもってゴミを処理しようとしております。

鬼石町がRDFでゴミ処理をしていかうと決めたのは平成7年の全員協議会でありました。それから4年間かかってようやくこの4月1日から稼働を始めたわけでありました。まだ一部調整をしなければならないので、当初の予定どおり全開というところまではいっておりませんが、ほぼRDFを製造し始めたということでもあります。

ここでの一番のネックは、その使い道をどうしようかということでもあります。平成7年当時、栃木県野木のリサイクルセンターと富山のナントリサイクルセンターが当時日本でのRDFを行う最先端の場所であったと思えます。当時は、ダイオキシンの対策もナントリサイクルセンターでやっている程度で十分クリアできる、問題はないということでありました。しかしながら、先月の30日には政府がダイオキシン問題の基本方針を決定するほど、今やダイオキシンは人類の存続を危うくするのではないかというふうな問題として位置づけられて、政府も国を挙げてこの問題に取り組んでいかうということになりました。

この4年間を振り返りますと、われわれも含めて、情報化社会だといわれていながら、結局、全然その情報を活かしていなかったのではないかと、国もそうだし、自治体もそうでしたし、私自身も反省をしております。具体的に申し上げれば、つい数年前まで、厚生省は家庭用の小型の焼却器を設置するなら国が補助するというをやっておりますのに、それが今や、小型の焼却器は家庭にも設置するのをいっさいよそうという方針を先日出しまして、それをいつからやるか、それをどういうふうに規定していかうかというのが今の現状であります。

これからは安心、安全と自己決定がこれからの時代のキーワードではないかというふうに私は思っているわけですが、そういう意味で、いま私たちの生きているこの時代は時代の分水嶺とっていいときで、その頂点に私たちに生活しているのではないかと考えております。

なお、鬼石町では保健福祉医療と教育こそが自治体のやらなければならないことで、他の分野についてはできるだけ手を引こうとしております。山間地の町でありますから、あれもこれもということは到底できません。そこで、去年からこの5年間で職員は10%削減して、新しい需要にそのお金を振り分けようということを行いました。

そしてまた、隗より始めよで、職員の皆さんには大変きついことをお願いするのがありますから、こういうことでいいかどうかはわかりませんが、町長、助役、収入役は気

持ちをしっかりと職員にもお伝えしようということで条例変更をいたしまして、町長が給料を 10%ダウン、助役、収入役、教育長も 5%ダウンということにいたしました。助役、収入役、教育長は結構ですというわけだったのですが、職員にきついことをお願いするのだから気持ちをしっかりと示す必要があるということで、賛同していただきました。今そんなことをやっております。そんなことで、今 70 市町村では私が最低の、月 66 万の給料をいただいております。

とにかく新しい需要に対応しなければならない。それにはどうするかということで、とりあえず町長部局の職員を向こう 5 年間で 10%削減して、今後の財政の必要なものに充てていこうということをやっております。

ちなみに、町長部局の事務職員は 10%減であります。保健と福祉と医療の分野の職員増が、この数年で、確か 150~160 人に増えております。保健と福祉と医療を一体として行っておりますから、町民の皆さんから何か不安なものがあれば電話 1 本くださいということで、窓口を一本化して、24 時間でやっております。24 時間といっても、病院がありますから、それらをうまく活用しているということでありまして、お金をかけないでこれからの介護の問題にも十分対応していこうということで今やっております。

病院は 97 床の病院であります。そこでは療養型、そして総合福祉保健センターのほうでショートステイ、デイサービス等をやっております。老人健康施設をつけて作っております。そこにも 40 床あってデイケアとかサービスを行っておりますので、2000 年から介護保険がスタートいたしましても、国が考えているそういうものについても、ハード面は十分に備わっております。後は民間との連絡協調とか、マンパワーをどうするかといった微調整の段階で、来年からの介護保険に備えております。

先ほど教育といいましたけど、保育とか幼稚園については、鬼石町では町立で保育園を持っております。民間がやっていかれないのでぜひやってくれということで、郊外の山を切りまして、鬼石町で関東平野を一望できる一番いいところに保育園を作り、今 5 年目です。入園式でお母さんとお父さんには、これだけいい環境で育てるのだから、将来大したことなければ、あなた方お父さんとお母さんの責任なのだから、とにかくしっかりやってほしいということをごあいさつ申し上げます。

それと、群馬県は県産材代を開こうということであります。山間地にありますから生産地に近く、しかも関越自動車道がすぐ近くを走っておりますので首都圏にも近い、すなわち消費地にも近いという地の利を活かして、森林に手を入れる、目を入れるということであります。林業従業者がなんとか増えないかという期待を込めて、いま群馬県とタイアップして、耳川の森林組合のような木材のコンビナート構想に向かっておりまして、来年度からいよいよそれがスタートします。

とりあえず 10 ヘクタールを鬼石町が買収し、土地の造成と事業形態等は群馬県林務部が率先して行うということで取り組んでおります。今年、群馬県は調査費を 600 万ほど計上しまして、鬼石町が木材の集散地として栄えた歴史を、ふるさと創生資金を使っ

て再度挑戦していこうということで、いま群馬県の林業の中心地を目指して着々と計画を進めております。

あるいは、野菜につきましては、有機野菜作りをようやく鬼石町もスタートいたしました。去年の秋ごろから3か町村で取り組んでいるのですが、国際基準を採用して行おうということで、去年あたりから野菜の出荷が始まりました。これからもいろいろ研究して、町も農家の方との連携に努め、安心して食べられるような、安心、安全のまちづくりに向けて、農業のほうにも力を入れていきたいというふうに考えております。

私は行政を担当させてもらって13年目に入りました。右肩上がりのときでは、少々の誤りがあっても、少々のやりすぎがあっても、毎年経済が上向き、町の税はあまり上がらなくても中央から来る補助金等がつくということでやってまいりました。そういう意味では、利害調整さえ間違えなければよかったような気がしていたのですが、昨今、国民の意識もだいぶ変わってまいりました。今年の2月の経済企画庁の調査を見ますと、健康の問題。このままいくと年金システムはだめになるのではないかとということで、すなわち生活費の問題。あるいは介護の問題については、自分の老後について不安を感じている人が、調査では全国民の73%に上がった。しかもそういう考えが若い人にも増えているというような結果が出ておりました。ちょうど同じような調査を総務庁が、1986年、昭和61年にしたときは老後に不安を持つ人が約44%でありましたから、そのときと比較すると、倍まではいきませんが、国民の意識は長期の不況があるとはいえ、ずいぶん変わってきたなというふうに考えております。

公共事業に対する取り組みもそうであります。鬼石町も桜山を中心に、シーズンの約40日を約20万人のお客様に冬桜を見学に来ていただくのですが、トンネルを造ってもう少し交通の便をよくすることを群馬県と一緒にやっていこうということで、そのお金が、トンネルも含めて約70億から80億ぐらいかかるであろうという計画がありました。しかし、鬼石町としては、今やっている改良を進めればほかでも十分やれる。トンネルの工事で新しい道路を作るために大規模に山を切り開いたりいろいろすることになるし、お金についても国民の皆さんの税金を使わせてもらうということを考えると、本当にいいのかどうか。必要性、緊急性から考えてどうだろうということになり、ついこのあいだ、平成10年度の終わりに群馬県に、その計画については、調査費をつけて、計画の一部を始めようとしていたのですが、返上いたしました。そんなことがあります。

ダイオキシンの問題でも、先ほど申しあげたとおり、数日前の朝日新聞を読みますと、ドイツと日本では大気に排出するダイオキシンの量が100倍ぐらい違うのではないかとという記事が載っておりました。最近読んだ、立花隆が書いております『環境ホルモン入門』という本では、100倍ではなくて、ドイツは1年間に約4グラムぐらいなのに比べて、一方、日本では1年間に15キログラムぐらいのダイオキシンを排出しているだろうというようなことが書いてありました。

埼玉県所沢市には、小型の、約 50 基ぐらいある、ダイオキシンをもち出すようなすごい産業廃棄物焼却場銀座というような場所がありまして、それをテレビ朝日が報道して、全国の皆さんが関心を持ったのが 2 月 1 日以降でありました。そういうようなこと等を考えますと、ある意味ではこれからは国や県に任せておかないで、われわれこそ勉強して、必要なものは積極的にやり、不必要なことはやらないということを、住民の皆さんと相談しながら、理解を得つつやっていかなければならないと思っております。

鬼石町はつい最近、3 月の定例議会でありましたが、情報公開条例をようやく制定させていただきました。議会と 1 年ちょっとかけてやりまして、知る権利を明記したり、あるいは何人条項も入れたりしました。どうしても選挙で選ばれてやっておりますと、自分たちのために役所があるような錯覚に陥りやすいのですが、よく考えてみれば、情報は住民の皆さんのものであるというふうに考えれば、情報はできるだけ開示し、万一が起こらないように日々注意しなければならないと考えております。

大雑把ではありますが、町の取り組みにつきまして概略を申し述べさせていただきました。ありがとうございました。

【篠田】ありがとうございました。それでは日立市の吉成助役さん、お願いいたします。

各自治体の紹介～茨城県 日立市～

【日立市・吉成】茨城県の日立市でございます。県内の県北地区に位置しまして、水戸が一番の大きな都市、日立が 2 番目の都市ということになります。10 年ぐらい前までは県内随一の工業都市ということだったのですが、水戸がどんどん大きくなりましたのと、日立製作所がご案内のとおりの影響を受けておりまして、行財政運営が非常に厳しいということでもあります。

さて、日立には、山間部を除いて、現在、約 1 万 4000 本の桜が日立市内の至る所に植えられておりますので、まさに今は花開く季節ということで、おそらく昨日今日と、1 週間早い満開になったのではないかと思います。このサミットに参加された皆様方も、機会がありましたらどうぞ日立のほうにおいていただければと思います。

さて、日立の桜は今では私たちの心を期待させるような見事な花をつけておりますが、そのルーツというのは、今回のテーマであります環境問題と大変深く結びついていると思われまので、ちょっと具体的なお紹介をさせていただきたいと思っております。

日立は、先ほど申しましたように、鉱工業を中心として町が発展をいたしまして、今を迎えております。現在の日立の原点といえる日立鉱山は明治 38 年に開業しております。当時の住民は煙害の試練に苦しむことになりました。鉱山発展の過程の中で、銅の精錬によって発生する煙が大変増えてまいりまして、そのことで近隣の農作物、あるいは山々の木々が枯れるという社会的な問題が発生いたしました。

そこで、日立鉱山は煙害を少なくするための対策として大煙突の建設と大規模な植林に取り組んだわけでありまして。当時は世界一、これはすぐに東洋一になってしまったの

ですが、当時は 511 尺といったそうでありますが、155.75 メートルの大煙突の建設は、まさに日立鉱山という会社の命運をかけた事業でありました。

さくらの植栽

また、山々の緑を蘇らせるために大規模な植林を行ったわけでありますが、そのときに、煙害の強い樹種を研究するという事を取り寄せられたのがオオシマザクラでございました。このオオシマザクラの試験植栽を行ったところ、煙害に強いということがわかったわけであります。当初は苗を伊豆大島方面から調達したわけでありますが、試行錯誤の末、種子、種から苗木を生産するという事に成功いたしまして、それから近隣の山々に 18 年にわたって約 260 万本のオオシマザクラを植栽したという記録が残っております。

このオオシマザクラの苗木がうまく育つようになりますと、このオオシマザクラを接ぎ木して、大量にソメイヨシノの苗を作りました。このソメイヨシノは、日立には日立鉱山や日立製作所に勤める人たちの社宅がたくさんありましたので、その社宅や、あるいは学校、道路などに植栽されまして、いま日立に数多く見られるソメイヨシノへとつながっていったということです。日立は南北 24 キロある長いウナギのような町なのですが、今日あたりはまさに 24 キロの山沿い、あるいは学校等に桜が咲き誇っているということでございます。

そうした背景がありまして、現在、日立で花開いているサクラの多くはソメイヨシノであります。そのルーツといえば、ただ今申しあげましたようなオオシマザクラにさかのぼるわけであります。日立の桜はまさに公害対策と、そして自然環境の回復というものの象徴でありまして、先人の皆さんのまちづくりの熱意の象徴ではないかというふうに感じております。

その後、日立は第二次世界大戦で壊滅的な被害を受けたわけですが、その復興のための市街地へのサクラの植栽と、そしてまた、市民 1 人 1 本を持ち寄って植栽をしようという献木運動が起きまして、かみね公園などの整備に取り組んで、まさに今の日立というものが作られたと思っているところであります。

日立と桜、そして環境とは、まさに歴史的に深いつながりがございまして、私たちは先人から引き継いだ桜を日立の貴重な財産として、これからもまちづくりに活かそうということでの市民運動、市民の方々の大変な後押しがありまして、今日まで進んできております。

若干、日立の環境問題への取り組みを申し上げます。日立は「創造とふれあいの町日立」ということを目指して、人間環境というものをいくつかあるキーワードの一つとして、快適な生活、あるいは自然環境を活かした、人と自然が共生できるまちづくりをしようということで現在進めているところであります。

日立のまちづくりの特色としては活発な市民運動と企業と行政の連携というものが挙げられます。福祉の面、文化とスポーツ、あるいは生涯学習活動など、さまざまな分野に多くの市民の皆さんがかかわっております。特に地域活動は積極的に展開されておまして、小学校を基準に22の学区があるのですが、そこでコミュニティを進められております。22の学区それぞれの特性に合った活動をしているというのがその現状でありまして、環境、あるいは緑化問題への関心も大変高いものがあります。先ほど話にありましたゴミの減量化、あるいは再資源化、河川清掃、地域の美化緑化ということでは様々なかたちで積極的な運動を展開しているというわけでありまして。

さて、桜に関しましては、平成9年に、市民や企業の代表の方々から、桜を活かしたまちづくりについて25の項目にわたるご提言をいただきました。現在はその桜のまちづくり提言賞の実現を目指しまして、まさに三位一体となって取り組んでいるという状況であります。

特にボランティア活動です。ボランティア団体が中心となって、テングス病にかかった枝の剪定とか、施肥、桜樹木の保護育成、あるいは苗木の育成、そしてまた桜の実態調査を行っています。実は1万4000本という数字は市民団体の方が踏査して、山間部は別としてですが、ソメイヨシノが約1万4000あるという数字を調査していただいたのです。いろいろなかたちでの実践活動をしていただいております。

このように、桜に関することにつきましては市民の方々の熱意と知恵で私ども行政の後押しをして助けていただいているわけでありまして、このようなボランティア活動を通して、いろいろなかたちでまちづくりに大きな貢献をしていただいているということをお願いしたいと思います。

ちょっと長くなって恐縮ですが、実はもう一つ環境と桜について現在取り組んでいるものについて申し上げます。あるいは皆さん方も、テレビで相当放映されたのでおわかりかと思うのですが、平成3年3月に大変大きな林野火災がありまして、210ヘクタールぐらい野山と、さらに隣接する住宅が被害を受けました。この火事があった後、助川山が失った豊かな自然をどのようにして取り戻そうかということで市と当時の営林署がお互いにいろいろ協議をいたしまして、実は平成5年度から11年度までの計画を立て、森林公園としてなんとか再生しようと努力した結果、現在までにだいぶかたちが出てまいりました。

このように、市のシンボルであります桜の植栽も大変進められまして、行政、そして先ほどお話し申し上げました市民のボランティア団体を中心に、自然の植生により合ったヤマザクラの植栽をするということで、ここの火事のあったところにはヤマザクラをいま植えております。ボランティアの皆さんには毎年、何回かに分けて下草刈りやいろいろなかたちでの積極的な取り組みをしていただいているのですが、これは次世代の人たちにつながる大きな活動、運動ではないかと思っております。

このように、私ども日立の市民活動の展開の背景には、市民の方々の町を愛するとい

う思い、そしてまた町の大切な資源であります自然環境を愛するという思いが、たくさん、大きなうねりとなって動いているのかなと思っております。日立は大変自然に恵まれております。山、海、そして桜といったこのような貴重な財産を次の世代につなげていくように、今後とも市民の皆さんのこういった思いを大切に、より積極的に取り組んでいこうということでもあります。

今年が市制施行 60 周年になります。ですから、今年はこの 60 周年の節目に、よりより桜にこだわろうということではいろいろな取り組みをしているという状況であります。以上でございます。

ディスカッション ~さくらの管理とボランティア~

【篠田】ありがとうございました。二つの市町からご発表いただきましたが、ただ今の発表につきましてのご質問とご意見をぜひともお願いしたいと思います。壇上に上がっていらっしゃる方で、まだご発言をいただけていないところもございます。折角の機会でございますから、ご発言をよろしくお願ひしたいと思うのですが、どなたかございませんでしょうか。

【静内町・野表】北海道の静内町でございます。私どもの町だけで面積 808 平方キロと、ちょっと小さな県と同じぐらいの大きさがあります。日高山脈のてっぺんまでございますので、非常に広大な土地の中にあります。桜はまだ一月ちょっとしないと咲きませんが、幅が 20 間、36 メートル、長さは 8 キロという桜並木があって、並木としては日本一、世界一ではないかと思っております。そういう桜の貴重な観光資源を抱えております。

今は桜とは違ったかたちで、鬼石さんから川の問題が提起されました。私の町にも、日高山脈を源流として流れてくる静内川という大きな川があって、この川に五つの発電用のダムがありますので、ダムができることによって魚がのぼれなくなるとか、いろいろな問題が提起されてきております。しかしながら、川はきれいな水をたたえて太平洋に注いでおります。

ただ、河口間際のところから分水した、支流の古川という小さな川が町のど真ん中を流れております。かつては魚の棲む、人も泳げたようなきれいだっただ川が、町民の雑排水等によってたちまちのうちにどぶ川に化けてしまいました。これをなんとかしようということでもあります。この川は北海道が管理する道費河川でございますので、なんとかきれいな川に改修してくれないかということではずいぶん北海道にもお願いをしたのですが、管理は北海道である川だけど、汚したのはあんた方町民じゃないかということではなかなか手をつけてはいただけませんでした。

そこで、この川に面する自治会等が主力となって「2001 清流の会」という大きな町民グループ、市民グループができて、年に何回かこのどぶ川を徹底的にどぶ浚いをし、

清掃するということが何年か続きました。このことに動かされたというか、そこまで町民が熱心に取り組んでくれるのなら、ぜひ大きな金をかけてこの川を改修しようという機運になってまいりまして、今年から 5 年から 10 年とかかる大きな仕事ですが、やっとその緒についたというわけです。

市民グループ、町民グループの団体は非常に強く、そういうものが自発的にできなければ何事もよくなるということでもあります。先ほどの上越のああいう貴重な取り組みなどにも非常に感銘を受けましたが、私どものところでも、そういうどぶ川がやっときれいな川に生まれ変わる緒についた、町民グループが非常に大きな力になったということを一例だけご紹介申しあげました。

【篠田】ありがとうございました。最近、多自然工法というようなことが建設省のほうでもけっこう進められていますが、その川はどういうふうな工法でおやりになる予定なのでしょうか。

【静内町・野表】まず、断面が非常に小さいので、平均した断面を大きくするという工法がありますが、その周辺は水辺の公園的な、徹底した市民の憩いの場、町民の憩いの場としての公園化をするという工法が採り入れられていきます。

【北郷町・植野】鬼石の町長さんにおたずねしたいのですが、ダムができて川の性格がなくなって、そのために水が少なくなって石を取る人が多くなったと。鬼石町というところですから、おそらく立派な石だろうと思いますし、それを返す運動をされているということで、それは大変いいことだと思います。川はやはり水が流れないと川という感じが出ないと思うのですが、ダムとの調整と水の関係はどのようになっていますか。

【鬼石町・関口】川に石を戻すというその対象の川は、先ほど申しあげた神流川の支流の三波川のほうです。ですから、神流川のほうにはやっていません。やっても、ほんの少々でして、神流川の支流の三波川だけはしっかりと守って、その川は後代に残していこうということでやっております。私の町は造園業が非常に盛んなので、ある時期、川の石の大部分をあげてしまったのですが、今はそれを戻そうというわけです。

【北郷町・植野】もう一つお聞きします。これは今まで発表していただいたことに関連することで、特に日立市が発表になりましたのでお聞かせいただきたいと思います。どこの町村でもボランティアとかいろいろな団体とかでやっておられるわけですね。北郷もそういうことをやっております。ただ、後の管理を行政主導型でやっておられるのか、どういう方法でやっていらっしゃるのですか。

【篠田】それは桜の管理ということによろしいですか。

【北郷町・植野】そういうことです。

【篠田】それではまず日立さん、お願いします。

【日立市・吉成】先ほど申しあげましたように、1 万 4000 本が 22 学区の中にそれぞれ点在しているわけですが、基本的には、メイン通りと駅前通りについては 50 年過ぎた老木なものですから、今 1 本 1 本診断をしながらやっていただいているということがあり

ます。

それからもう一つ、では全体的にはどうなんだということですが、実は非常にヨシノザクラが多いものですから、調べていただきましたところ約65%がテングス病にかかっているということで、最近もNTTさんの工作機械を借りてテングス病の枝をおろしました。主だったところにつきまして、市民団体花樹の会、あるいは進める会などが行っております。

そして、22学区の取り組みとして今こういうことを考えております。それぞれの学区で、その学区として一番象徴的な桜が咲いている地域、あるいは桜の木を5月半ばまでに出していただいて、地域の中で桜を考え直そうということをやっておりますので、具体的に地域の中の取り組みがさらに展開されるのではないかと考えております。

【北郷町・植野】それはよくわかったのですが、例えば管理費です。下刈りの手入れ費とかそういうものはどういうふうに行われておられるのですか。

【日立市・吉成】行政からは金銭的な援助はほとんどないです。機会を作るとか紹介してくれるだけで、後については、相当なお金がかかると思うのですが、地域の方の皆さんのボランティアでやられているというふうに理解しております。

【角館町・黒坂】私は実際に実務をやっているわけなのですが、桜というのは非常にお金がかかりまして、最低でも、年間1本1万円とってください。最低これぐらいは必要です。北に行くほど桜の開花期間というのは短くなりますが、私どものほうでは1週間ぐらいです。1年のうちで1週間ぐらいは注目されて、マスコミの方もたくさん来てくださいますけど、実は桜というのは年間を通して管理しなければいけないので、それが非常に厄介なわけですね。

例えば、今1万本の桜を植栽するというお話ですけど、手のかからない桜を植えないと、後から非常に困ることになってきますので、そのへんを皆さんはお含み置きおいたほうが良いと思います。

それから、日立さんのお話を聞くと民間団体の方が活動をなされているということで、非常に羨ましいと思います。私どものほうでは枝垂れ桜が群として天然記念物に指定されているのと、それから2キロメートルの堤防の桜がありまして、これが国の名勝指定になっています。観光用の桜は1000本足らずなんですけど、これだけでも、実はお金でまいつているわけです。みんな行政にお任せということで私どものほうに来るわけなんですけど、行政のほうとしては入場料がもらえないので一般財源なものですから、お金が不足で非常に困っています。そういったことで、日立さんのお話というのは非常に羨ましいと思っておうかがいしました。

実務のことで何かご質問がございましたら、私にいただければ、後でもお答えいたします。

【篠田】今日は木次町さんもいらしているんですが、確か前回、町の住民の皆さんが植え

るだけではなしに保護、管理もやっているという話を聞いたような記憶があるんですが、そのへんを参考までにお話しいただけますか。

【木次町・佐藤】私も先ほど日立市さんと鬼石さんのボランティアの話を非常に感心して聞いておったわけです。木次町におきましては、桜の木自体は、先ほども話がありましたように非常に特殊な木で、病気にしてもテングス病の除去についてはかなり高所作業が伴いますから危険があります。そこで、住民が一番参加してやっているのは、そうした桜並木の除草です。地域で区域分けをいたしまして、年間何回にも及んでやっております。そういうことで、桜並木の下の芝生の仲は本当にいい場所になっております。もっともっと住民の人には参加していただきたいとは思っています。

今年は、一つ変わったニュースがあります。先日、1日に、日本桜の会から全国表彰を受けたのです。それは、町民参加の「一花の吹雪」という創作劇に対してです。木次町の名物であります河川堤防の桜は明治の末から植えられまして、幾多の伐採の危機を乗り越えて育ってきているものなのです。いったん、大正時代に切られまして、昭和の御大典記念で植えられたものが、その後、戦時中、また戦後と、河川堤防であるが故に伐採の危機があったのですが、そうしたことを乗り越えて現在に至っているという歴史を創作劇にいたしまして、それを約 70 名ぐらいの町民のボランティアの皆さんが演劇でこれを表現し、公演したわけです。これは神話のふるさとかから桜の女神が語りかけるということで、桜の精を通して桜の生い立ちをずっと語っていったというもので、非常に感動を呼びました。これをもって、町民の皆さんが非常に桜を大切に作る心がまた一段と生まれてきたと思っています。

中でも一番端的なのは、例えば、民間の工場などにも桜の木があるのですが、今までだったら、自分の会社の都合で勝手に切ったりしていたものを、桜がちょっと邪魔になるんですが切っていいんでしょうかというような相談があったという、そうした事例もございます。

ただ、こうした意気が盛り上がったときに、先ほどの日立市さんとか鬼石町さんのように、確実にボランティアにつながるような手をこれから何か打たなければいけないなと思っております。日立市さんがこれだけのボランティアができるというのは何が原因なのかと、感心して聞いておりました。

【篠田】後からパーティもありますので、その場で秘密をぜひとも聞いていただければ幸いです。

【水上村・上原】私の村は熊本県の水上です。私の村の人口は 2900 人で、世帯数は 950 という小さい村ですが、その中に 2 万 5000 本の桜がございます。先ほど日立の助役さんから、ボランティアでやっておられるという話を聞いて羨ましく思っています。うちも年に 1 回、7 月末に全戸数から 1 人ずつ出て下払いをお願いしておりますが、それ以外に桜の診断、テングス病の除去、肥料の施肥などに、平成 10 年度で約 1000 万程度の金をかけております。先ほど日立の助役さんからボランティアでいろいろなことがされ

ているということを知って、羨ましく思ったところでございます。

【篠田】あとまだ発言がないところもございませうが、もう一つのご発表を地元の北郷町さんにやっていただきますので、それをお聞き取りいただいた後にご質問を受けたいと思います。よろしくお願ひいたします。

各自治体の紹介～宮崎県 北郷町～

【北郷町・植野】今日、柳生先生の話を知っておりまして、ちょっと頭に残っているところがございます。山の色が一つだということを知りました。それを思ひますと、北郷あたりはスギの人工林一辺倒で、だいたい90%ぐらいの人工林率でございます。そういうことを思ひますと、なるほどだなと思ひたのです。しかし、去年今年あたりからヤマザクラを非常に多く見かけるようになりました。しかしながら、戦後の乱伐による人口林増のために、まだまだ広葉樹帯は少のうございます。

私達は370年の飢肥杉の伝統を知っているわけでございますけれど、柳生先生のお話のように、なんとかして広葉樹を植えながら、四季それぞれに落葉樹、あるいは常緑樹等を植栽しながら環境を守っていきたくて、そういうようなことを今日は最初に考えたのでございます。

私達は環境とか自然を大事にしなければならぬということ、そういう問題に取り組んでいるところでございます。北郷町では平成6年に環境条例というものを設置いたしまして、行政の基本的な責務と住民や事業者の責務というものをはっきりさせながら、北郷町の環境を守っていかうということ、環境条例を作りまして、その中に、自然環境の保全と緑化の推進を謳っているわけでございます。公共施設における緑化の確保、あるいは工場等の緑化、あるいは宅地等の緑化等の推進を努力目標として進めているところでございます。

環境事業～ボランティアによる植栽活動～

具体的な取り組みを2、3申し上げたいと思ひます。まず、緑化木を配布いたしました。これは募金事業としてやっているのですが、各地区の単位公民館に緑化木を配布して植栽しておりますが、これが15集落に対して約1076本という数字になっております。そしてまた、小鳥にやさしい森づくり事業として、森林公園や公共施設に実の生る木を中心に植栽活動をしております。今回サミット会場となった花立高原に広葉樹を植栽いたしまして、自然の探索や野外学習に活用することとしております。

北郷町の花はエビネでございます。今回はサミット会場の玄関入り口にも、愛好会の方々がすばらしいエビネランを展示してくださっていますが、町といたしまして、エビネランの保存と自然保護、そして環境緑化の普及として、エビネラン5000本を花立高原にも植栽しているところでございます。

北郷町は何よりも桜の町として、昭和 56 年から、町民の皆さんのご協力をいただき、植栽運動をしてきました。これがすなわちチェリータウン構想でございます。今日おいでになっております名誉町民の高橋良則が、どうしても北郷町を日本一の桜の町にしたいという発想の下に、日本一の桜の町にしようというところで始まったのがチェリータウン構想でございます。現在までに約 1 万 8000 本の桜を植栽しておりますが、このさくらサミットを北郷町で開催できますのも、この植栽運動に携わっていただいた皆さん方の多くのご協力の賜であると考えております。

また、今回は、ご承知のとおり、宮崎県が全県を挙げて 5 月まで実施しております第 16 回全国都市緑化フェア、いわゆるグリーン博みやざきの開催期間中に今回のサミットを実施させていただいたことは特に意義があるものと考えております。グリーン博は、緑豊かな潤いのあるまちづくりを目途として開催する花と緑の祭典でございます。約 77 ヘクタールの広大な会場を中心に、各会場でいろいろな催しを実施されておりますが、県外からサミットにおいでになった方も、おそらくご覧いただくのではなかろうかと思っております。このようなことも環境緑化の普及啓発であります。

北郷町ではいろいろな団体の方々や高齢者の方々に、常にボランティアを中心に、町内の各所に桜の花の植栽を行っていただいているほか、今回のサミットに合わせまして、自治公民館でも地域や沿道の緑化の一貫として花いっぱい運動を展開していただき、サミット期間中におみえになる方々を花でお迎えしようということで取り組んでいただいております。環境保全是なにも大都会だけで論議されるものだけでなく、むしろ、国土保全の立場から、緑豊かな大自然を有する山間地域でも率先して取り組んでいくことが大切なのではないだろうかと思っております。

今日は、各地区からご発表いただきましたことで大変勉強になりました。今後、こういうことを参考にしながら、さらに環境緑化、桜植栽等に進んでまいりたいと思っております。

ディスカッション ~さくらの道~

【篠田】ありがとうございました。同じ町村ということで、まだご発言いただいております加治川村の村長さんのほうからご発言がございましたら、よろしく願いいたします。

【加治川村・秦野】新潟県からは上越市の藤原助役さんから発表がありましたが、加治川村は新潟県でも山形県境にある、県庁所在地の新潟市からは約 30 キロ離れた新発田市の隣の村でございます。私のふるさは日本一小さな櫛形山脈の山裾にございまして、面積にして 37 平方キロと、日本の 1 万分の 1 という面積を持つ村でございます。

古くからは縄文の皆さん方が住まいしておりますけれど、私たちの生活の基盤としているところは、約 280 年前、徳川八代将軍吉宗のころに新田の開発ということで、約 2000 町歩開発した地帯でございます。隣の新発田市は溝口公が加賀の代償地から移封された

わけでございます。30 キロ離れた村上市は、徳川譜代の村上周防守が慶長 2 年。あまり長くは申しあげませんが、新発田は慶長 4 年です。そういう流れのなかで、新発田は外様、村上市は譜代でございます。

加治川という川は、かつて昭和 41 年、42 年と連続して破堤をいたしまして、皆さん方から大変お世話いただいた川でございます。先ほど、島根のお方からお話ございましたが、ここは桜が両岸に長堤十里植えられて、日本一、東洋一といわれたところでしたが、たまたまその桜の根の老化によって水害が起きたということで、御大典記念で植えられた桜は全部伐採されてしまったのです。

したがいまして、新発田市、加治川、隣接 4 町村で、今全部その両岸に桜を復元いたしまして、早いもので、見ごろのものができておりますが、間もなく往事の名声を高めることも間近だと思っております。

今ひとつ、うちの村は、先ほど申しあげましたように、日本一ですから、高さ 400 メートル、13.5 キロの山があるのですが、この山は鎌倉時代の城主の居城でございます。ここにヤマザクラがございまして、昭和 9 年に国の天然記念物の指定をいただいております。この時期になりますと、約 1 万人ぐらいの皆さんにおいでいただきます。また、私の村では世界の桜をということで、世界の珍しい桜を 100 種類ほど植栽いたしまして、いま立派に咲くことを願っているいろいろと会議をいたしております。そんな関係でございます。

1500 町歩の基盤整備、下水道という関係で、環境には取り組んでおりますが、新潟から村上市まで 60 キロ。日本海高規格道路に 3000 億の予算で取り組んでおります。その大きな決定的な山の土は、うちの村から約 500 万立方メートルぐらい出しますので、これから平成 14 年、間もなく供用開始ということまで至っております。

問題はいろいろとたくさんありますけど、私は去年から村長をやって 2 年目でございます。今日は皆さん方のお話をいろいろかがって、とまらないような汽車に乗るような首長の仕事をしておりますと、こういう機会にゆっくりさせていただいたのは、また新しい明日からのエネルギーになります。大変お世話になりました北郷町の皆さん方と、自然の豊かさと、特に皆さんの、私たちを迎えてくれる接遇のすばらしさは、ほうぼう歩いてありません。すばらしいところでご縁ができましたことを大きな財産にして帰らせていただきます。ありがとうございました。

【篠田】もう時間が迫っております。幸手市市長にはまだご発言いただいておりますので、時間があまりないのですが、簡単にひとつよろしくお願ひしたいと思います。

【幸手市・増田】私は長い話ではできませんから、1 分でお話しします。

さくらサミットに私は 6 回連続で来ています。なぜ来ているかといいますと、みんなは自分たちの町の桜が好きなんですね。ですけど、やはりここに来てもっともっと刺激を受けて、いろいろ勉強して、帰ってからもっと自分たちの好きな桜をよくしたいと思

ってやってきたわけです。皆さんの話を聞いて、大変ためになりました。ありがとうございました。

まとめ

【篠田】極めて簡単にまとめていただきまして、こちらのほうから御礼を申しあげなくてはいかんわけです。

こういうものはなかなか時間どおりにはいかないんですけど、柳生さんの熱演がありましたものですから、つつい遅れてしまいました。大変申し訳なく思っております。会場の皆さんからももっと意見等を聞かなくてはいかんわけでありますが、後ほどのパーティにご出席される方もいらっしゃると思いますので、その場でいろいろとご質問を賜ればありがたいと思います。

今日は、一つのテーマを出して意見発表をしていただき、それを巡ってディスカッションをするという新しいサミットの形式を行いました。はたしてうまくいったかどうかわかりませんが、大変有益な話が出たのではないかと思います。

柳生さんのお話ではいろいろなことをいわれましたけど、日本人の持っている自然に対する気持ちをもっと大切にしようではないかということがメッセージであったような気がいたします。そういう点では、今日のテーマは「人にやさしく、桜にやさしい環境づくり」ということですが、自然に対してもっともっとわれわれがやさしくしていく必要があるのではないかと、柳生さんの話を聞きながら私は思ったわけであります。

若干、こんな情報もありますよということを最後に皆さんにお話して締めくくりたいと思います。循環型の社会を作ろうというテーマに沿って、こんな試みがなされているということです。一つの例は、滋賀県のほうで取り組まれているものようですが、休耕田に菜の花を植えていって、その菜の花を絞って油を作るというものです。これをバイオディーゼル作戦といっているらしいのですが、その絞りがすが飼料になってまた使えていくということで、菜の花プロジェクト・バイオディーゼル作戦といっているようです。これはすでにドイツで展開されておりまして、それを日本でもやろうではないかということで滋賀県の愛東町でなされているということです。こういう試みがあるということが一つです。

それから、過日、環境庁のほうで全国の都道府県、政令市、あるいは市町村にアンケートをしたのですが、日常生活を通じた環境負荷低減活動、エコライフの実施状況を調べたところ、都道府県では51%、政令市では55%ぐらいがなされているのですが、市町村レベルではまだ19%ということで、まだまだ取り組みがなされていないということのようであります。

そういうなかで一つおもしろい試みとして、環境家計簿ということを行っている団体があって、それが大変効果的なのだということが載っておりました。大阪府で、家庭を環境家計簿モニターにして、自動車利用を抑制する、資源ゴミのリサイクル、ゴミの減

量化をどう図っているか、節電をどうしているかということについて家計簿をつけていくことによって、CO₂の消費量を下げていく、CO₂の削減効果を計算するというもので、これが大変効果的だということが出ておりました。

いろいろな試みがなされていると思うのですが、そういう手近なことで、しかも市民の皆さんを巻き込んでできるようなものを作っていくということも大切なのではないかと思います。

それから、冒頭、私はビオトープというものの考え方があると申しあげたのですが、ドイツあたりでは高速道路を地下に潜らせて、その上を、ビオトープの考え方で、まさに野性的な自然を再現するということがなされているようであります。日本はそこまではいっておりませんが、小学校の校庭に学校林のようなものがよくありますが、そういうところにビオトープの考え方で、野生動植物が棲むような、自然にトンボが飛んでくるとかいうふうなものを作っている学校が最近かなりあるようです。小さな子供のときから自然にやさしい気持ちを持つ、そういう人間を育てていくような環境を作ってあげるといことも大切かなということで、ビオトープのものの考え方をいろいろな面で導入できるのではないかという感じを持った次第でございます。

先ほど申しましたように、地球環境問題というのは非常に大きな問題でございます。われわれの力というのは、ある意味ではちっぽけなものかもしれないのだけれど、そういうわれわれの日常生活のちっぽけなものが、地球環境問題というものの解決につながっているというふうに思うわけであります。

今日はここに一堂に会しまして、地球環境問題を中心にいろいろご討議いただきましたが、これからそれぞれの地域にお戻りになって、ぜひとも取り組みをしていただければ幸いと思います。特に、今日は上越市さんのほうからISOへの取り組みについて発表いただきました。これからの地方分権の時代にわれわれは自らの知恵で、考え方で行政を運営していかなくてはいけない。その場合には役所の職員のもの考え方を変えていかなくてはいけないだろう。そのためにもISOが非常に有効に使われているという発表でありまして、これも大変時代になかった取り組みをされていると思いました。皆さん方も、お時間があればぜひとも上越市のほうにご視察に行かれることもいいのではないかと考えております。

まとまった総括というのができないのですが、以上をもちまして私のコーディネートとしての役割を終えたいと思います。ありがとうございました。

共同宣言

【司会】それではここで、本日の事前会議、そして本会議の結果を踏まえまして、共同宣言を発表していただきます。植野町長、よろしくお願ひいたします。

【北郷町・植野】共同宣言を発表いたします。

第 11 回さくらサミットは、全国から 14 の自治体が一堂に会し、花と緑に包まれ、美しい季節を迎えた宮崎県の北郷町で開催されました。私たち、桜を基調にまちづくりを進めている自治体は、情報の交換と発信をねらいとしてここに集いました。桜はふるさとの情景を思い浮かばせると同時に、日本の文化や精神の創造に大きなかわりを持ってまいりました。

私たちは今回のサミット開催にあたり、地球環境問題が各方面に論議されるなか、桜をとおり、ふるさとの環境を守りながら次の世代に引き継ぐことの重要性を認識し、本サミットのテーマを、「人にやさしく、桜にやさしい環境づくり」として、行政レベルと住民レベルの両面から環境対策や緑化対策の取り組みや、その必要性を討議してきたところです。

私たちは桜の縁で結ばれた自治体として、桜にやさしいふるさとの環境づくりを行うとともに、今後のサミットのあり方などについての討議を踏まえ、さらにネットワークの強化を図り、サミットから全国へ情報の発信が可能となる具体的取り組みを行っていくことをここに宣言します。平成 11 年 4 月 4 日。

さくらサミット参加自治体。北海道静内町。秋田県角館町。茨城県日立市。群馬県鬼石町。埼玉県幸手市。東京都北区。新潟県上越市。新潟県加治川村。岐阜県根尾村。奈良県吉野町。島根県木次町。長崎県大村市。熊本県水上村。宮崎県北郷町。

第 11 回さくらサミット in 北郷開催地代表。宮崎県北郷町長・植野章一。

次期開催地の紹介

【幸手市・増田】埼玉県幸手市長の増田実です。幸手とは幸せの手と書きます。そこで私たちはハッピーハンドシティと呼んでいます。幸手市は埼玉県の県東部に位置します、5万8000人の小さな市であります。江戸時代は宿場町、戦前は農業の町、現在は東京都内のベッドタウンという、そのような町であります。市民一丸となっていい町を作るために一生懸命に頑張っている元気な市でもございます。

私は6年前に市長に就任をしてから、桜にだけこだわってきました。といいますのも、今から30年以上前ですが、県内の高校に入ったときに自己紹介で、桜で有名な幸手と言って笑われました。幸手の桜ってそんなに有名なの、聞いたことない。また、幸手ってどこにあるの、そのようにいわれて、とても傷つきました。そのとき思ったんです。見ている。そのうち、絶対に幸手を有名にしてやる。幸手の桜を有名にしてやる。その一存で6年前に市長選挙に出ました。受かったんですね。なかなか粋な市であります。

ですから私は一生懸命に桜を有名にするために頑張ってきました。もともと、土手があって有名なのですが、それに10万本植栽運動というものを唱えまして、どこでもいから桜を植えてしまおうと、学校とかそういうところに植えまして、なおかつ、枯れた木のところには桜を植えてしまおう。どこからでもサクラが見える、桜の中に町があるという、そのようなまちづくりを展開しているわけであります。ぜひ、皆さんにも来ていただきたいと思います。

私はよくいわれるんです、おまえは桜しかできないのかと。でも、桜ができるだけでも2年前の市長選挙再選できたのですから、やっぱりいいなって思っているんです。そんな町でありますけど、市民一丸となって大歓迎しますので、ぜひ、皆さん、幸手市に来年来ていただくことを心からお願い申しあげ、ごあいさついたします。ありがとうございました。

さくらサミット～第2部～

開会

【北郷町・植野】本日はサミットの第2部といたしまして、関係自治体の方々と担当者の方々を踏まえまして、第10回までに懸案となっておりました事項等について、本日、北郷町が事務局といたちでご討議をお願いしていたと考えております。



それでは、ただ今からサミット第2部を開会させていただきたいと思ます。

現在、このサミットに1度でも参加をしたことのある団体は27団体ございます。しかしながら、過去の開催状況をずっとたどってまいりますと、だいたいご参加いただける団体が17から18ぐらいになっていて、残りの団体は、その1回だけで、後はご出席にならない状況でございます。

しかしながら、私どもは事務局を仰せつかりまして、この27団体の方々すべてに、最初から最後までご案内をさしあげながら本日の会議を迎えてきたところなのでございますが、次の事務局を担われる自治体のことも考えますと、私たち事務局としまして、この27団体にサミットへの加盟の認識がはたしてあるのかどうか。それと、今回で11回を迎えるわけでございますが、このまま推移いたしますと、後4～5年のうちに、だいたいここにご参加いただく15ないし18ぐらいの団体の開催がほぼ1回ずつ終わってしまうのではないかと。ではその後はどうなるのかという心配もござます。

それと、かたちといたしまして、サミット連盟とかそういう枠組みがございません関係で、サミットを開催する部分がすべて開催地主催といたちになっておりまして、このサミットの運営そのものにも少し討議を加えていく必要があるのではないかと。このことを、担当者会議でお話をさせていただいたところでござます。

皆様からいただきましたアンケートの結果につきましては事務局のほうで整理をさせていただいて、各27の自治体のほうには事務局のとりまとめとしてご案内をしております。そして、本日は今後のサミットの運営のあり方、ならびに事務局の設置のあり方等につきましてご討議をいただきたいという趣旨でこの2日目の会議を持たせていただきました。

今後における諸課題

【篠田】それでは引き続きまして、私のほうからこの案件につきましてご説明申しあげ、皆さんにご議論いただきたいと思います。

ただ今お話がありましたように、このサミットも今回で 11 回目を迎えたわけでございます。全国にはいろいろなサミットがあると思うのですが、10 回も 11 回も続けてやっているというのは極めて珍しい、そういう点では大変歴史のあるサミットであると誇っていいのではないかと思います。しかし、そういう伝統のあるこのさくらサミットでございますが、ただ今植野さんから話がありましたような問題を抱えているということも、また事実でございます。

そういうことで、この伝統あるさくらサミットがより充実したものであるために、さらには全国でいろいろあるサミットの中でもフロントランナーといえますか、先頭を行くサミットとして今後どうあったらいいのかということをご一緒ととも議論していくこともまた必要ではないかと思っているわけでありまして。

今日は、お手元に資料がございますが、3 点につきまして皆さん方で議論をしていただきたいと思います。まず一つは常設の連絡事務局の設置でございます。2 番目にサミット参加自治体の定義の問題。3 番目にサミットにかかわります会議の役割だとか権限の明確化ということでございます。

常設連絡事務局

【篠田】まず最初に、サミット常設連絡事務局についてということでございます。ご案内のように、今のサミットは、次回はこちらのほうによろしくということで手を挙げていただき、そちらのほうにバトンタッチをするというやり方で開催しているわけでありまして。そういうことで、その都度その都度、サミットの事務局は開催地の自治体が受け持つということでやっておりますし、その点は、今後も同様のやり方で引き継がれていくものだろうと思います。しかし、その開催サミットの事務局を受け持つ自治体にとりましては、サミットを円滑に運営していくに当たっていろいろな情報を得なくてはいかんわけでありまして。

過去からのいろいろな宿題もございまして、そもそも第 1 回からはどういうふうな流れできたのか。だいたいテーマというものを作っているわけですが、当然ながら重複したテーマでは意味がありません。そういうようなこと等、自分のときのサミットについてはこういうふうな点について工夫をしたいと言ってみましても、過去の詳細な流れというものが把握されていないと、なかなかできないわけでありまして。

ところが、バトンタッチ方式であるということだとか、さらには公務員には付き物でございますが、2 年だとかそこらへんで人事異動があるということで、前回、あるいは

前々回の話を知ろうとしても、もうすでに担当者がいないというようなこともありまして、今までの経過等を知ることがなかなかできないということもあって、当番のサミット事務局にとりましては、しんどい思いをされてきているわけでありまして。

それとともに、近年行われておりますサミットではかなり重要な課題が提議されておりまして、その提議された課題をきちんとフォローするという非常に重要な役割を持たされているわけですが、そのフォローというものも、ただ今申しあげたような、その都度その都度の事務局ではなかなか十分にできないというような問題も抱えております。

こういうことがありまして、確か前回の北区さんのときだったと思いますが、常設の連絡事務局的なものを設けたらどうでしょうかという、若干提言的なものが出たように思います。そこで、事務局同士、担当者同士で1年間かけて検討せよということで下命を受けておったわけでありまして。その一環といたしましてアンケートを採っていただいたわけでありまして。アンケートを採っていただいた中で、回答が13の団体からあったようではありますが、常設の連絡事務局、つまり、恒常的な継続活動といったものができるような事務局を設置することについて、設置したほうが良いという意見が、13のうち10ございました。こういうことで、基本的にはこういうものがあつたほうが良いというのが皆さん方のご意見であると思うわけでありまして。

そういうかたちでもって、その都度その都度の事務局とは別に、どこかに連絡をするような事務局をお願いするということになるわけですが、そういう常設の連絡事務局を設けた場合に、ただ連絡をするだけの機能を持たせるだけでいいのか、折角のことならば、もっと有効に活用していいのではないかとということが当然考えられるわけでありまして。

そういうふうなものとして、例えばホームページのようなものを作って全国の皆さんに語りかけていくとか、あるいは、それぞれの参加自治体のデータとして、例えばどここの町村の桜はいつごろが見事であるといった桜情報を流すとかいろいろあると思うのです。データベースを持ち、そして全国にPRをしていくというわけですね。インターネット上にホームページを作っていくというようなことをやるのもいいのではないかとということについての意見を聞きましたところ、これにも大変多くの方から、10のうちの9団体から、結構なことだというご返事をいただいているということでございます。

ですから、そういう常設の連絡事務局を設けるとなると、折角のことだから、さらにインターネット上にホームページを作るとか、さらには、それぞれの自治体の観光情報を流すということにも使うこともできると思います。より積極的な活用策というものを考えたらどうなのだろうということでありまして。

そして、そういうふうなことをやるなら、当然ながら、ホームページを作ったり何なりする場合にはやはり団体の名前というものがないとアピールすることが難しいと思うのです。例えば、これは仮にこんな名前だったらどうかということの一つの例として申

しあげるのですが、全国さくらサミット振興協議会とか、全国さくらサミット振興連盟だとか、いろいろと名前があると思います。そういう名前の下でいろいろと活動をしていくというわけです。

参加団体の自治体の中には、例の桜のオーナー制度、あるいは桜の里親制度というものを設けているところがかなりおりのようではありますが、こういうものもインターネットの上で一斉に呼びかけていくということになれば大変いいのではないかと思うわけです。昨日の柳生さんの話の中にも、私の木が宮崎にございますというような言い方をされておりましたが、いろいろなところに自分がオーナーとなった桜の木が植えられているということだと大変楽しいことにもなるわけであります。

そんなことで、常設の連絡事務局を設けたらどうでしょうかというご提案でございました。

一つ付け加えるなら、こういうふうな活動をきちんとやっているということでありますと、議会の先生方にとりまして、インターネットのホームページを開いてみたら、なるほどこういう活動をしているのかということでも十分にご理解をいただける。そういう意味では、議会对策上も非常に有効な手段になるのではないかという感じがするわけであります。

そういうことで、サミット常設連絡事務局を設けたらいかがでしょうか。そして、その暁においては、より積極的な活用をしたらいかがでしょうかという提案が事務局のほうからなされておりますので、このことにつきましてご意見等、ご質問等うかがったうえで、皆さんの最終的な決定をいただければありがたいと思います。北区さん、いかがですか。

【北区・中澤】昨日はちょっと遅れましたことをお詫びいたします。私は今、これは法務省の関係ですが、外国人登録ということ年全国の市町村でおやりになっていただいておりますが、その団体の事務局を引き受けさせていただいております。東京の会長区ということで、それが全国の会長区をやれということになって事務局をやらせていただいております。

これなどは、団体には全部の都道府県が入ってしまっているのですから、会費は年会費的なものを分担金のかたちでいただいておりますけど、わずかで済んでしまうんです。年に1回、法務省に集まったの全国の理事会、後、研修会というようなことをやって、秋になりますと全国の各ブロック別に持ち回りをいたしまして、そこでまた全国理事会というのをやっております。その程度なんですけど、これにつきましては、私どもの場合は東京都のほうでご配慮いただいて、23区と東京都の間の財政調整の交付金がございますが、その中に担当職員1人分の人件費と、わずかな事務費ですがそれもいただいているということでやらせていただいておりますから、人手の問題等はそこで解消できてしまうんです。

問題は、今うちのほうでやらしていただいているサミットの場合、全部で17~18団体だということになると、そのへんがどうなのか。年間の運営する費用をどう捻出したらいいかというようなことになろうと思います。

これは私の考えで、あくまで今ここでの考えなんですが、ぎょうせいさんに今まで陰に陽にいろいろとお骨折りいただいていたから、ぎょうせいさんのほうで事務局的なことをやってやるよ。だけど、当然、事務費とか印刷費とかいろいろ年間の運営費がかかるから、それはひとつ参加の各自治体で負担せよ、ということで後の大会については今までどおりやらせていただければ、それだけでもずいぶん引き受けた自治体のほうが大会などをやるときでも楽になるのではないかというふうに思うのです。ここはいかがなものでしょうか。ぎょうせいさんあたりが、一肌脱いで事務局をやってやるよということにでもしていただいて、後は応分の負担をどうするかということになると思うのですが、そんなことはいかがでしょうか。

【日立市・吉成】まったく北区区長さんがおっしゃったように、私も今回出席するに当たりまして、今までの運営とか仕組みを実は勉強させていただいたのですが、株式会社ぎょうせいさんが受託してやっているという経過のなかから、やはりぎょうせいさんに事務局を受けていただければと思います。もう一つは財源ですね。年会費という格好で納めるのはなかなか説明がしづらいので、年1回のサミットのときに若干それに上乗せ、という悪いんですが、何かそういうかたちで留保して運営するほうが、当面の間違いではないでしょうか。

これからこのサミットの仕事というか役割をどの程度拡大するかということについては、私自身はもっと桜にこだわっていいのではないかという気持ちも、昨日の話を聞くと感じましたが、しかし一方では、いま篠田先生からお話があったように、観光とのリンク、その他あると思うので、そのへんはより専門的立場のぎょうせいさんにアドバイスなりご提言をいただいてやれば、より深みのあるサミットになるのではないかという感じがいたします。以上です。

【篠田】その他のご意見、あるいは反論でも結構でございますが、ございましたらお願いします。

【大村市・島】大村市の島です。私は助役になりましたのが半年前で、今回、サミットに初めて参加させていただきました。

このサミットそのものがどのような目的といふかねらいにするのかということですが、先ほど来、篠田先生から、10回、11回と続くのは非常にすばらしいサミットだという話がありました。昨日もちょっとございましたように、参加各団体の自治体の縁を大事にしながら、桜についての共通の認識を持って、今後、桜についてどう取り組むかということとをそれぞれ勉強するという程度のことであるのなら、今お話がございました、3年前5年前の記録がどうだったのだろうかというのではなくて、その都度その都度担当していただく自治体でできないものかと思うわけです。

ただ、昨年の北区での開催、そして今回の北郷での開催において、事務局さんがどの程度ご苦勞されたのかという実態を教えていただけないかと思うのです。

【篠田】それでは、事務局のほうでこんなしんどさがあったということ、今回、バトンタッチを受けて今日に至るまで、あるいは運営を含めて、お願いします。

【北郷町・植野】事務局がしんどい思いをしているとは、私どもは思っていないんです。ただ、一番大変に思いましたのは、今回私どもがやる中で、先ほど申しあげましたように、過去において参加されている自治体が 27 あるわけでございます。そうしますと、最初に参加の意向というのを取らせていただいて、そこから第一歩が始まるわけでございます。その意向を取らせていただいた段階で、例えば今回出席いただけるのが 17~18 という線が出てくるわけです。

ただ、事務局を仰せつかった以上、その 18 の方々だけを対象にして本日まで来るということをしているのかどうか、そこがわれわれの一番の苦勞の種でございました。すべてのご案内を、やはり少しでもご縁で結ばれた自治体でございますので、最初から最後まで、いわゆるこの本会議の最終的なレジユメを送る前段までの諸準備は、すべて 27 団体の方々も含めて行わせていただきました。たぶんこの段階で、事務局が各自治体の方々と事前担当者会議の開催をやりますなかで、その連絡を密にできればいいんですが、ファックスでやりとりすることも多いわけですが、中には参加もしないのだから後は連絡はいらぬというお話にはなりません、やはり同じように連絡をしまりました。そういう意味で、開催地としての事務局は私どもでやって、例えば会場でありますとか会議の内容、あり方、テーマの設定の仕方といったあたりは、受け持った担当事務局のほうでやれると思うのですが、その加盟されていると思われる自治体の方々の連絡調整といったあたりを別の枠でやっていただいたうえで、開催地としては中身の問題をどうするというのを専門にやらせていただくと、事務局としての運営までの手順が非常に楽になるのではないかと思うわけです。

私どもは今回やらせていただきます前に、前回開催地の北区さんでは辺見さんがご担当されたのですが、辺見さんから、予算のことから案内の方法からすべて、逐一、ご教授をいただきながら開催をしてきました。いわゆる運営に対するマニュアルを持っていないところから始まるものですから、どこから手をつけたらいいのかがまずわからないというのが、引き受けた事務局の実際の悩みの種ではないかと思えます。

例えば、ぎょうせいさんはサミット本会議の仕掛けのところはやっていただけなんですけど、それでは予算はどうなっていたのかというお話になりますと、各自治体で催されるイベントとかそういう問題にいろいろ違いがございますので、サミットにはいったいいくらお金がかかって、どういう手段から始めていけばいいのかといった、このへんの運営のマニュアルといいますが、ここらあたりの情報がぎょうせいさんが受け持っている部分からだけでは得にくいわけです。しかも、参加自治体の把握がしにくいという

状況でございます。

私どもは前々回の上越市さんの情報と北区さんのほうの情報をすべていただきまして、それをベースにしながらうちなりのものを作るというスタイルになるのですが、仮にこれで、そのときご担当でありました、前回の北区の辺見さんがご異動になったということになれば、今度は実際をお聞きしたり連絡を取り合ったりすることが難しくなっていくのではないかと思います。

ですからそういう意味で、来年度開催の幸手市さんのほうには、私どもがここに積み上げた、うちではこうやりました、予算体系はこうしましたというところから、マニュアルをすべて引き継ぎをさせていただいたほうがいいのではないかと思います。それにしても、受けられた担当の方は、そういう一方の出始めからのマニュアルを持っていないということが最大にネックになるのではないかと思います。

今日をご担当の方々がいらっしゃいますので、事務局を受け持たれてのご意見がございましたらお願いしたいと思います。

【大村市・島】どうもありがとうございました。よくわかりました。ただ、昨日から北郷さんのわれわれに対します接遇といいましょうか、準備といいましょうか、素晴らしいものがございまして、これは仮に常設的な連絡事務局を持っても、引き受けられた自治体さんの苦労はあまり変わらないのではないかと思います。13分の10の中には、総論としては連絡事務局を持つことに賛成ということですが、しかしながら各論に入りまして、ぎょうせいさんをお願いする場合に、経費の問題はどうなるのかというようなことを一つ一つつぶしていきますと、本当に常設的なものがあるのか。あるいは、今おっしゃったように、今回のいろいろな実施した内容をマニュアル化してそれを幸手市さんのほうにお譲りすればそれで足りるのか、そのあたりではないかと思うのです。

【鬼石町・関口】私のところでは、ないないサミットというものをやっております。これは、全国120いくつの、国道や鉄道のない自治体が集まって、いまから12年ほど前に京都で発足したものです。

京都の弥栄町の町長さんが非常に馬力のある方で、このあいだお辞めになったのですが、その方が最初にそれを提案して、それを全国の自治体に問い合わせたところ、ぜひやっというところになったわけです。それぞれ持ち回りでやって、それぞれの地域振興策を勉強しようという趣旨でありました。

国土昇格の時期が終わったのですが、それでもかなりの数が昇格したからこれでいいじゃないか、これで解散しようということになったところ、全国で100前後のところから、こうやって任意で集まるチャンスはそうないだろう、それよりも、地方分権等がいよいよこれからで、こういう団体こそがこれから必要なのではないかとということで、いま進んでいるわけです。

そこでは会長を決めて、そして非常に大変なことなんです、会長の町村が全部事務局をとるんです。私もたまたま最初からその会に入っていた経緯があって、次は鬼石町

がやれということになって、それで今は鬼石が 82 町村の事務局も会長も引き受けてやっているのです。ですから、さっき言ったようないろいろな経過等もそこで把握できるわけでありませう。

1 年に 1 回のことであってそんなに大変ではないというか、職員は大変だと思うんですが、とにかく 1 年に 1 回総会を兼ねて集まってそこでわいわいがやがややって、2 日間いろいろ議論したり、夜はやっぱりお国自慢をお互いに話し合ったり、伝統的な芸能を見せてもらったりして、次の日には視察をさせてもらうということで、好きだから集まるんですね。

そういうこともあるので、さっきのお話を聞いて、確かに事務局とか開催の町は大変ですが、もともとがやらなければならないとかがどうしようかというので発足したのではなくて、大いに勉強しよう、その一つのきっかけを「ないない」ということでくくろうということやってきているというわけです。

この会は最初からぎょうせいさんに仕掛けをしてもらって、かなりの大きな部分をぎょうせいさんをお願いしているわけですが、ここで改めて常設の機関を置くのもいいんですが、ここでお金等がさらにいるということになると、今までと違ってどれだけのメリットがあるのかとか、どういう研究の成果があるのかということになって、かえってきつくなる部分も出てくることは確かではないかと思っております。

一つの手法としては、会長を決めて、その市町村が引き受けるという手もありますね。いま、80 いくつのものをしていて 3 年目に入っていますけど、大変といえば大変だし、大変でないといえば大変ではないわけです。それはさっき言った、1 年に 1 回でもそこでいろいろな人と親交を温めたり情報交換するという場をセットできるという、ある意味では使命感というか、それも一つ、大変だけど楽しさでもある、そんなふうに考えております。

また、昨今の自治体を取り巻く環境も変わってきましたね。地域振興ということ言えばすべてがクリアされて OK だということから、いまは自治体の果たす役割も、果たしてどうなんだろう。国や県が言われていることに沿ってしっかりやっていたら間違いはないというふうに本当に考えていいのだろうかとか、私はいろいろな問題が出ているのではないかと思うところ、桜をキーワードとしてそれぞれの町村が集まって議論することについても、それぞれの市町村が持っているスタンスもありますね。だから、そこで常設の期間を設けてやるということについては、やり方によってはお金をかけずに従来どおりでやっていく方法があるのではないかと思うのです。

もっとも、さっきの北区の区長さんのお話で、今後それでも詰めていくのも大いに結構ですし、会長のようなものを決めてやっていくことも一つの方法ではないか。それが、結果的には常設の事務局を設置するのと同じようなことになりますしね。そんなことを参考までに申しあげました。

【篠田】このさくらサミットの場合には、やり方はいろいろと工夫しているわけですが、必ず皆さんに発言をある程度やってもらうという配慮しているわけですね。今の鬼石町さんの話で、80何団体、あるいは100団体の人が一堂に会してサミットをやるということになると、もちろん発言するもしないも自由であるということで、いうならば協議会の年1度の総会があって、そこで決議がされているかどうか知りませんが、政府のほうに向かってこういうことをやれという運動をしていくというふうな感じではないかと僕は思ったんです。それと、このさくらサミットとは若干感じが違うのではないかと僕は思うんですが、100人も集まってやるということになると、推進協議会はどういうふうなやり方なんですか。

【鬼石町・関口】会長を引き受けている町村が、1年間のいろいろなやりとりを全部やります。今回はこんなふうにやろうという意見があるけど、これについてはどうかとか、今回参加するかどうかということについてもやっています。その間、入りたいというところもあるし、抜きたいというところもあります。そういうことをいっさい含めて、私のところの政策推進室に担当を置いておいて、そこが中心になってやります。

【篠田】サミット当日の運営というのはどういうかたちでやっていらっしゃるのでしょうか。

【鬼石町・関口】議題を決めていくつか出しますね。例えば、今年は、デカップリングを推進しようじゃないか、そういう運動を働きかけていこうじゃないかというものが、いくつかあるものの内の一つにありました。その時々に応じて、今年はこんなふうに行うと思うんだけど、それについてご意見があったらぜひ聞かせてほしいと、あらかじめ参加町村に連絡を出しておいて、それでやっていきます。

だから、これだけのことで、あえてほかのことに置かなくても、さっき言ったように会長を置くということでも十分やっていけるのではないかとということです。それと、事務量については、大変といえば大変ですし、やれるといえば現にやっていますから、常設のものをほかに出すほどまで必要かどうかと私は思うのです。

【木次町・佐藤】私は島根県木次町ですが、この4月の人事異動で変わってまいりました。以前のことは全然わからないのですが、第1回を木次町でやったことはもちろん覚えています。そのときは参加団体は少なかったのですが、今日お聞きしましたら27団体ということでしたから、あまり増えていないんだなと思いました。全国さくら名勝100選でも100団体が選ばれているわけですし、昨日の話にあったように、環境問題に関しましても緑化の重要性はよくわかっております。

お互いに情報交換といいまして、全国に広まっておりますが、10何団体ということよりももっともっと広い範囲で情報交換ができればいいと思います。

【篠田】おそらく二つあるのだらうと思うのです。さっきの鬼石さん、あるいは今の木次さんがおっしゃるようなかたちで、団体の数を集めて、ある意味では利害団体として、例えば桜を抱えているところではこういうふうな環境問題があるので、政府はもっとこ

ういうことに政策を進めよとか、こういう助成制度を作れというようなことで一致して行動に移していくという、そういうかたちの推進協議会というようなものが一方であると思うのです。それともう一方では、現状のさくらサミットのようなかたちでもって、圧力団体というよりは、むしろ仲間としての勉強会といったかたちのものがあるのではないかと思うのです。

確かに、数を増やしていくということについては、それはやっていかなくてはいかん面もあるでしょうし、それはある意味では可能だろうと思うのです。そうすると、従来のように、発言を皆さんに平等にやっていただくということにかなり留意をしながら運営していくということではできなくなってしまいますね。100人も平等になんていうことは絶対にできないわけなので、そこらへんをどう考えていくのか。

そういう意味で、利害関係団体として、対政府、対なんとかにアピールしていくということを中心にねらいとするのか、そうではなくて、維持していくのか、さらに膨らませるとしても、そこらへんを考えていかないと大変なのではないかという気がするんです。

【木次町・佐藤】特に利害団体になって政府にどうかというような気持ちではなくて、もっと広く、日本全国に桜が普及したほうが良いという、もっと単純な意味です。

【篠田】だからそれはそれということとして、いうなら総会の持ち方です。総会の持ち方ということになると、出席してもらっても、当然発言をする人しない人がおってもそれはしょうがないという割り切りで、ある問題について、例えば今年は五つの議題で議論をして、それを総括して一つの決議にしましょうというようなかたちでやっていくというのだったら、それはそれであるのだろうと思うんです。

【根尾村・道下】岐阜県の根尾村です。実は、私たちは昨年からお仲間入りさせていただいているわけですが、今お聞きすると27団体ほどがあるということで、今日ここに参加したのは14団体ということで、それぐらいの小規模な団体ですと、私たちも、もしこのようなサミットをやれと言われた場合には引き受けることもできるけど、大きなサミットになってくると、われわれみたいな行き止まりの村ではとうていお引き受けできんということになってきます。その点、やっぱり小規模で、本当に桜を愛する団体が寄ってやるサミットのほうが私はいいのではないかと思います。

【幸手市・増田】話がずれてきたと思います。常設の事務局を作るかという話なので、それについて話をしたいと思うので、それでいいですね。

私がいっとう最初に言った常設の事務局は皆さんの言うのとは違うんです。こういう小さい団体ですから、順送り、順送り、順送りでやっていくなかでいろいろな情報とか、事務局がいろいろやっていくのがいいと思うんです。そこで、いま言ったように前の人たちとの交流、後ろに引き継ぐ交流があるわけで、だってこんなに小さい会なのでから、それはとても大切なんです。

ただ、私が言った事務局というのはファイルするというんですか。毎年毎年、1回目はどうだったのか、2回目はどうだったのかというそういうことが、単年度制でやっていくとけっこう消えていってしまう、なくなってしまう、写真一つでもどうこうなってしまうわけです。だから、そのこのところをちゃんとできるところが常設の事務局であればいいなというぐらいの話なんです。

要するに、本来的にはそういうものがちゃんと一つの箱か何かで、今までの資料はこれですよ、翌年はこれでいきましょうということやっていかればいいわけです。常設というのは、さっきから言っているように、100団体ぐらいあるんですけど、これであれば手作りのサミットでいいし、ファイルがちゃんとできていけば私はそれでいいなと思うわけです。

だから言っていることは同じなんです。常設という意識がちょっと違うので、そのこのところがちゃんとできれば、わざわざ作らなくても、要するにアットホーム的な会だと思っていますから、そう思います。

【篠田】話は広がってはいますけれども、常設事務局をどうするかというのは、この団体のあり方について、目指す方向がこうであれば事務局はこうでなくてはいかんじゃないかということに絡むものですから。その他、ご意見はございませんでしょうか。

【北区・中澤】いま幸手市さんのおっしゃったような意味でも、結局、冒頭、私が申しあげたように、ぎょうせいさんならぎょうせいさんに引き続きお骨折りいただくなかで、それを事務局として正式に位置づけをするということによって十分そういったことは可能になるのではないかと思っています。

私どもが参加させていただいたのは、私どものところには桜もあるんですが、これの維持管理、手入れなどはどうするんだろうというときに、そういったところは桜の名所の皆さんだからいろいろなノウハウをお持ちだろうから、そういうことを勉強させてもらったというのが一番のねらいで入ってきたのです。

確かに、毎回いろいろな議題はあるんですが、必ずしもそういったことは、あるときは出ても、継続していないんですね。だから毎回変わっているようなことなので、何か継続してそういったような必要なことがやっていかれるようなかたち。これが一定の事務局があって、いま幸手さんがおっしゃったような継続性のあるところの運営ができるなら、参加される団体にとってもより都合のいい団体なのではないかと思うわけです。要は、私ども桜を持っている区として、皆さん方のノウハウをいろいろ教えていただく中で、これからもよりいっそう桜について力を入れていきたいというのが趣旨なのです。そのためには、どうしてもこういったところに入るし、入ったからには、そういったお骨折りいただくところが常設というかたちであって、必要なことはいつでもそこに連絡したり問い合わせをさせていただければ、こんなに都合のいいことはないだろうという考えなのです。

【篠田】ぎょうせいさんとしても今ここで金額がどうだこうだということはいえないでし

よう。要は、皆さん方のご意見ですと、とにかく財政が厳しい折に、これが多額なものになって財政的に非常に大きな負担になるようなことはぜひとも避けるべきだという感じがしますので、そこらへんについては十分にぎょうせいさんと話をしてみて、それをまた皆さん方にフィードバックをするということにする。とりあえず常設の連絡事務局といったようなものを置いて、それは限りなく実費ベースというようなかたちでやっていただけるように交渉をしてみるというようなことで、この点についてはよろしゅうございますか。

【吉野町・福井】関口さんがおっしゃった案の、これをぎょうせいにとすることはどうですか。

【篠田】ぎょうせいでもいいかどうかということについても、それはあるかもしれませんが、他に代わるものがあればそれを含んだ上での提案です。

【鬼石町・関口】みんな、地域振興をそれぞれが学びたいというのが出発点なんです、このさくらサミットも最初はやっぱりそうだったと思うんです。私も最初から出ているので、やっぱりその時々いろいろな流れとともに変わってきているなと思います。だから大勢参加しなくても、本当に桜の好きな、桜でもって地域興しをやっている自治体が率先して加わって進んできている団体なので、小さくてもそれなりに温かさがあるし、とてもいいと思うんです。

そういうことで、急にというか、常設をということになったから、そんなに大変なのかなと私は思ったんです。自分のところの経験として、100前後の団体があってもそうやってやってきているんですが、そんなには不便はないんです。それと、そのときのいろいろな決議したこととか話し合ったことも一応はファイルしてあって、だいたいこういう流れできているということがわかるようになってきているから、そんなにノウハウが必要で、それでどうこうということもないので、これからは、よほど毎回の成果をそれぞれきっちり出して、それこそどこかで発表するぐらいにやるのかなとも思うわけです。常設ということなので、ちょっと私は身構えたんです。

【篠田】さっきのアンケートの一つに、これは担当者ベースなので首長さん方のご意見がどのぐらいまで入っているかわからないんだけど、インターネット上にホームページを開いて、国民の皆さんのほうからアクセスができるようなことをしてみたらどうか、あるいは、いろいろな桜についての情報といったものを載せておいて、それも国民の皆さんに開いてもらうようにしたらどうだろうかという、そういうふうなことも考えたらどうでしょうかという質問に対しては、大方の担当者の方々が賛成をされているわけです。

そういうようなことをやるとなると、これは当然ながら365日の世界ですから、その都度その都度の話ではなくなるという意味で、常設連絡事務局というふうにここでは表現しておりますが、どうせならそういうふうな機能も持たせたらいいのではないかとい

うのが担当者の皆さんの大方の考えなのです。

ただしそうなると、それは単なる事務局とは違って、ホームページを開くならその制作費みたいなこともかかるでしょう。私はその点の計算は全然わかりませんが、仮にぎょうせいさんとすると、そこらへんの話も極めて低廉な価格でもってできるようにお願いをしなくてはいかんわけでしょう。

そういうことも連絡事務局の機能に加えたらどうでしょうかということが事務局ベースの提案にあるものですから、単にその都度その都度のサミットだけの話ではないということを含んで議論していただければと思うんです。

【幸手市・増田】事務局を作るとはいいということで、私は賛成します。ただ、北区さんもわれわれも関口さんもみんなそうだと思うのだけど、この会でどうこうどうこうではなくて、桜が好きだから、もっと桜をちゃんとして市民に喜んでもらいたい。そのためにはここに来ていろいろな勉強になり、刺激になるというふうな感じで来ている人が多いと思うんです。

そこで、いま言ったように、事務局がやるということについては賛成でいいんですけど、あれもこれもというと疲れてしまうなということになるんです。それで、また人集めに奔走すると何なんだろうなということになってくる。

私はいろいろな出張に行くんですけど、それがけっこう疲れて嫌だなと思うのだけど、ここだけはなんとなく楽しみながらできて、アットホーム的なので、幸手に帰ってから頑張るぞという感じがするので、そのカラーもとても大切だと思うんです。

それからもう一つ、さっき福井さんもちょっと言ってましたけど、ぎょうせいさんがちゃんとやってきてくれて、来年も頼みますけど、問題は、これからどうなるかといったときにずっとそこに決めてしまうこと。それから、そういうことはないと思うんですけど、そうすると、あそこに聞かなくてはわからないということになって、そこには絶対に権力が生まれると思うんですけど、これはいかがなものか、それはとても違うなと思うわけです。

だから、事務局にするのはいいですし、今までのぎょうせいの実績もわかりますし、私も賛成です。ですけど、これからずっとこの人に頼んでしまおうということになると、よくあるじゃないですか。町でも、担当が同じ人がずっとやると、あの人に聞かないとわからないということになってそこに権力が生まれてしまうということが。その選択方法が、では何がいいのかと言われてもわからないんですけど、とても慎重にやってほしいと思うわけです。

【篠田】そういう点では、これではまずいなというふうな事態が出てくるならば、仮に某社に事務局が委託されておっても、そのへんはやっぱりきちんとした方向になるように、このサミットとして方向を変えていくということは当然しなくてはいかんでしょうし、できることですから、それを今後の注意事項として明記しておけばいいかなと思うんです。

どうでしょうか、吉野町長さん、何かご意見はございませんか。

【吉野町・福井】少なくとも、政治的行動しようという話題は、今まで 11 回の中で 1 回もなかったんです。

付随的に出たホームページということについては、今までも集まればホームページの話は必ず出てきますね。ですけど、事務局を作ってそれを専門にやるというのが本当に必要なのかな。ホームページは過去に作っているでしょう。それについて、事務局が必要かどうかというのがよくわからない。

【北区・中澤】今の吉野さんの意見に関連しまして、北区がやらせていただいたときに感じたことは、結局、ぎょうせいさんに聞いてもすべて全部わかってしまうわけではないんです。今までぎょうせいさんには骨を折っていただいていたから、一応すべてうかがってみても、そこで全部を掌握されているというわけではないんです。そうすると、前回やったところに、私どものときは上越さんでしたけど、そこなり何なりにうかがうということになります。

だからそういったことからやってみて、全体として流れをつかんでいるところが何か、こういったサミット会議の経費の面から何から全部わかるようなものが欲しいということ、やってみて感じたんです。

先ほど鬼石さんがおっしゃるように、会長がいて会長区がやるのだったらこれは簡単だと思んですが、会長がなくてやるからそこに難しさがあると思えます。会長がなくてやるとすれば、どこか会長に代わるところの事務局が必要なのではないかということです。次回の会場になったところが、その都度その都度、経費の面からなにからあらゆる面でどうやってやるんだろうというところから勉強しなければならないから、そういうのを代わって常時押さえていただくといいなということで、それが、たまたまここで表現されている常設事務局ということに結びついたわけなんです。何かそういうところが欲しいという感じがします。

【吉野町・福井】そういうことをいったら、ぎょうせいさんはべつに常設事務局にならなくてもやってくれると思います。

【鬼石町・関口】私のところは、私が町長になって何年かしてのことだったので、それがこういう、人数は少なくとも全国組織だということで、うんと職員が張り切ったし、私自身もうんとやり甲斐を持ちました。だから今でも、ないないサミットもそうなんですけど、この会というのは、よし来年は自分のところかということ、小さい町村にとっては非常な生き甲斐もあるしやり甲斐もあるし、職員のいい刺激になると思うんです。だからそれこそが、さっき出していたアットホームなことだと思うんです。

それは大変です。前はどうかだったか、その前は何をやったか、その前は、と言っていたら本当にわからないということになってきます。それは確かにそうです、11 回にもなっていればわかりません。しかし、小さい町村であればあるほど、職員はやっぱり燃

えると思うんです。これをある1点のところではスパンとやってしまうのはどうかと、ちょっとそういう寂しさもあって、いやいや、100ぐらいの団体があってもやる気になればやれるのだから、1年1年は大変だけれど、しかし、そうガラッと変えるのはどうか。

だから常設の意味です。先ほど篠田先生から、そのへんについても、費用はどうかと実際の中身はどうかということで、もう少し詰めてやることも必要かなというお話がありましたけど、そういうことも含めて何か異質なものが入り込むような気がちょっとしたものですから。さっきの区長さんの言われるとおり、お引き受けすれば、あまりにもそのへんが曖昧模糊としている部分もあるなというふうにも感じられるところも、またあると思います。

【篠田】ぎょうせいさんも、実質的には正直いってやってくれているわけですね。実質的には。もちろん、それはある意味ではぎょうせいさんが地方公共団体とは大変つながりが深い出版社だから、いうならばそこは阿吽の呼吸の分野でやってくれていると思うんです。それで非常に助かってはいるわけですね。

だからそれを明示的にこういう場でもってきちんと位置づけていく。おそらくぎょうせいのほうもそれでもって儲けようという頭もないだろうと思うし、ましてや大変な高い金をわれわれのほうに提示するということもないのだろうと私は思っています。

ぎょうせいと交渉するというか当たってみて、こういうふうなことであるなら、やめるとかやるとかというかたちで、情報をもう一遍皆さんのほうに戻すということでもかまいませんし、それはやれる話です。これぐらいの小さなサミットですから、確かにおっしゃるように、そんなにでかい仕事があるというものではないんでしょうけど、ただ、過去の蓄積というものがあるわけです。

実は私は去年北区のコーディネートを受け持たされたときに、過去、第1回からのものを全部読んでみないと、どういうふうなことが議題となっているか、どういうふうなものが問題点としてあるのか、宿題となっているのかということがわからなかったんです。そして、それはどこに行き行って教えてもらうかということ、ぎょうせいしかないわけです。やっぱり、そういうものがあるからこそ初めてわかるわけで、仮に、私が別の方にコーディネーターをバトンタッチしても、その人もおそらくぎょうせいに行かないとわからないのだろうと思うのです。そういう意味の結節点というかそういう類のものとして、常設事務局というふうな表現をしていると私は思っています。

後の話は付け足しの話ですけど、どうせならばもっともこの存在を国民の皆さんに知ってもらってもいいじゃないかという担当者レベルの気持ちもあるものですから、それがホームページという表現で現れているわけです。これは付け足しの分野として今日は考えていただいて、とりあえず連絡的な機能を果たすところがどこかにあったほうがいいじゃないかということです。

私もここまで顔を突っ込んでいる立場から、ぎょうせいさんのほうとちょっと当たっ

てみて、それを皆さんにフィードバックするということで、第1の議題はとりあえずそういう方向でやらせてもらうということでもいいでしょうか。それでは宿題ということでございます。二、三、意見の違いはありましたけど、できるだけぎょうせいさんのほうに、皆さんによしと言ってもらえるような方向で交渉してみたいと思います。

サミット参加自治体の定義

【篠田】次に、サミット参加自治体の定義でございます。これは、冒頭に植野さんのほうから話があったような悩みですが、それを解消するための提案です。今はサミット参加と言っているわけですね。したがって、その都度その都度、来たい人は来てください、希望の向きはどうかということで参加ということになっているわけですが、もう10回ぐらいになると、この協議会というのか連盟というのかそれは別としまして、継続してここでお互いに勉強し合おうではないかという継続意思といったものをきちんと持った団体として、サミット参加自治体と、あるいはサミット加入団体というふうな言い方もできるかと思うんですが、定義したい。

ここにゴチックで書いてあるところですが、「さくらサミットは、継続参加を意思表示した自治体が桜を通じ、地域振興に寄与するテーマについて討議する会合である」という定義の下で、継続意思というものをきちんと表明するというを条件としています。ですから、今後、仮にサミットの参加をさらに呼びかける場合でも、そういう意思表示をしているところについてサミット参加、加入を認めるということをしたらどうかということであります。

かなり過去の例を見ますと、ある団体で引き受けますと、その県のその団体の周辺のところも、うちもちょっと加わってみようかというので加わっている例もあったようであります。しかし、結局それはそのときだけの気持ちで、以後、全然参加されないということがあるものですから、それではいかなものかというのでこういう提案になっているわけであります。

大方の意味としては、こういう定義でいかなもののでしょうか。継続意思というものを持ってもらいたいという、ある意味では当たり前といえば当たり前のことだと思うんですが、この提案でよろしいでしょうか。それではそういうことでやらせてもらいます。先ほどからアットホームという言葉が出ていますが、アットホームな雰囲気のあるサミットであるというメリットも活かしていくということになると、拡大はするとしても、そこにはある程度の、一定の限度というものがあるのかなと思うのです。

継続意思ということを中心にここで表明してもらおうということによって、そこらへんである程度の縛りにもなるのかなということなんです。若干、とにかく加入者を増やしていくという方向も含めて、自治体の定義ということを考えておりますので、お含みをいただけたらと思います。

サミット内会議の役割と権限

【篠田】3番目の、サミット内会議の役割と権限の明確化ということについてです。これは、現在、サミット本会議がありますと、当日、サミット本会議の前にだいたい昼食かたがた事前会議というものを開きまして、当日の確認を行うということをやっております。それから、サミット本会議の前に担当者レベルの会議を開きまして、サミットの運営の仕方等について、担当者の皆さんで意見を開陳し合うということで、サミット本会議、事前会議、担当者会議というものが行われ、そこに書いてあるようなことが権限というか、役割の大方の事項ということになっております。これは確認でございますので、こういうことでいいかということが一つ。

それから、このサミットの会議の、いうならば分科会という表現がいいのか、技術担当者の交流会というふうな意味なんです、それだけに限らないわけではほかのこともありうると思うんですが、首長さんレベルのものではない、かなり各論的なものを分科会として置くようにしたらいかがなものかという提案でございます。

技術的な分科会というものをやりますと、その分科会の議事録をきちんととっておくとか、そういうことをフォローするにも、本当はさっきの連絡事務局的なものがあるとききちんとできるわけですね。

まとめ

【篠田】それでは、本日の議題は三つありました。一番最初のもので宿題となりました。後日、交渉の状況についてフィードバックさせていただいて、それによってもう一遍、どうかかたちでもって首長さん方のご意見をうかがうかはありますが、必ず首長さん方の意思を確認するようにいたしますので、きちんとしたご返事をいただきたいと思っております。

それと、先日の担当者会議で私が提案を申しあげていたわけですが、押し花絵のコンクールの位置づけについてです。押し花絵コンクールを今回もやっておられまして、隣の柳生さんとも、大変いいことだと話しておりました。今回は表彰式を皆さんの目の前でやったということで、おそらく応募した皆さんは非常に晴れがましくて、とてもよかったと思うのです。

例えば、今回のサミットでお作りいただいたこの資料には押し花絵コンクールのことは、パッと見た限りですが、位置づけが特にされていないように思うのです。あれとこれとは主催団体が別だということもあるとは思いますが、民間の方々がああして非常に賛同して、おそらく私費で出張されてきていると思うので、ありがたいと思うわけです。ですからこの位置づけについて、今のようなかたちで、一応別だけれども、場所だけを貸しておくということでもいいのかどうか、ということが一つ。

それから、応募資格が地域限定されていますね。基本的にはサミットに参加している

自治体に限るようなかたちになっているわけですが、地域限定でとどめたほうがいいのかどうかということ。この点については、われわれのサミットの事務局が押し花コンクールの事務局も引き受けるという意味では全然なくて、それは別として、位置づけの話をしているわけですが、地域限定をやめて全国版にしてもおもしろいのではないかと思います。

あるいは、今回の大賞であります。私などは、もっとこういうものを皆さんに認識してもらうためには、どうせなら郵政局長表彰よりはもっとでかい郵政大臣表彰ぐらいにまで持ち込んでもいいのではないかと思います。

この押し花絵コンクールのいきさつについて、今回初めての方もいらっしゃるので、事務局のほうでそのへんの経緯がわかればいま説明しておいてもらえますか。

【事務局】押し花絵コンクールにつきましては、発祥が新潟の上越市さんでございます。上越市さんがサミットが開催されるときに、実はこれは日本手芸普及協会というところがやっているものなのですが、東京のほうに株式会社ヴォーグ社という、生涯学習の関係で手芸を普及する会社がございます。そこが上越市でサミットが開催されるときに、初めてさくらサミット大賞というかたちで生まれたものだということを私どもは聞いてまいりました。

ただ、この開催については、先ほど申しあげましたように、私どもが事務局になっている部分はありません。さくらサミットを開催するときにサミットの参加自治体とその開催地の地域の住民の方を対象に作品募集をされるのですが、全国に押し花のコーディネーターとかインストラクターの方がいらっやいまして、その先生方を中心に作品の募集などをやられるわけです。

サミットが決定いたしますと、直ちにヴォーグ社のほうから、開催地がこちらであるということに併せて押し花のコンクールを開催させていただきたいという連絡が入ってまいります。そこで私どものほうも、せっかく第1回が上越市さんのほうで生まれた、しかもこのさくらサミットをご縁に生まれたということもございまして、昨年の北区さんの2回目に引き続き、3回目を北郷でお願いをしたという経過がございました。

生まれたそのものが違うところで運営されているものですから、われわれのほうも内容的にはよく存じあげていないのですが、今回は私どものほうから、さくらサミットをご縁で生まれ、ここまで育てていただいているのなら、せっかくですからサミット本会議の中で表彰などをさせていただいたらどうかというご相談を、こちらから逆にいたしました。今までは、展示の部分がありまして、その後にそれぞれ受賞された方々が普及協会のほうで表彰されるというかたちでしたから、サミットの中では表彰式典などが見えていなかったわけですが、せっかく全国から募集されますので、今回初めて、来ていただいて発表し、表彰していただくというスタイルを取りました。

押し花絵の審査についてですが、実は北郷では1日から7日まで展示をするんですが、

作品が来るのがギリギリでございまして、31日までに届くようになっておりました。しかも、31日の夜に展示を始めまして、1日の朝に審査の結果がわかるというシステムになっております。その関係で、表彰をうけられる方が、遠くの方にこちらに実際においでいただくとかそういう作業が始まるのが2日以降というお話になってまいりまして、とてもサミットの資料の中に表彰者の氏名とかそういうものをお入れすることは、今までのスタイルだと無理があるわけです。作品が作品なものですから、ギリギリでないとその結果がわからないということもございまして。

今回は一つの試しということで、せっかく会場にお見えなのですから、サミットの中で表彰をさせていただいたという経緯がございました。

【篠田】ご質問はございませんか。

【日立市・吉成】それ以外のことでよろしいですか。実は、事務レベルの協議にもあったようですが、私も日立もいずれ皆様を日立にお招きしたいという気持ちもあるわけですが、桜の開花時期ということといえば4月ですね。そこで予算編成のことを考えますと、次々期の開催地ぐらいままでをご議論いただいたほうが、議会等の対応がうまくいくわけです。実は事務レベルでいきますと数百万かかるというお話です。やり方によって少しは違うにしても、それだけかかるのは当然でありまして、そういう理解を求めのにも時間が必要だと感じておりますので、できればそういうスタイルにしていいただければいいなというふうに感じております。

【篠田】次々期については複数出たときにはそのへんは話し合いで事前に決めるということで、それは手が拳がれば別に難しい話ではないのではないのでしょうか。そのときになって市長さんとか首長さんが替わってしまうというような話はあるかもしれませんけど。

【日立市・吉成】実は私どものところでは飯山市長が今度4月に辞めるんですが、非常に桜にこだわっていただいたのでここまで来ましたので、それを受け継ぐにはきちっとしたかたちを示していけないといけなかなと思っております。もちろん否定はされないとは思いますが、そういう思いもありましてちょっと申しあげました。

【篠田】次の幸手さんのときから、次の次のところも声があるというのだったら、それも議題に載せてもらって議論をさせてもらうということで、それはいいんですかね。

さっきの押し花のことはどうしますか。幸手さんが次回ですから、そのへんはもう少し時間がありますので、いろいろと工夫ができるのなら工夫をしていただきたい。

必要があれば、僕は郵政大臣にでも自治大臣あたりにでもやってもいいのではないかと思うんです。若干そういうふうな気持ちがしたものですから、位置づけが、折角一生懸命にやっている人に気の毒な感じがせんでもないものですからご提言をしてみただけでございまして。

皆さんのほうから、この際ということで、何かございませんでしょうか。

【幸手市・増田】昨日感じたんですが、こういう会議だと別なんです、往々にしてさくらサミット自身、けっこう時間がルーズなんです。時間というのは見に来ている人に

対しても、不特定に対しても約束だと思っんです。例えば3時40分から5時15分とかです。来年は幸手ですからこだわりますけど、やはりこだわることがとても大切だと思っんです。そういうことが昨日は感じられなかったの、時間どおり終わるのではなくても、もう少しなんとかならなかつたものかと思っましたし、それはこれからもみんなが気をつけたほうがいいと感じがしました。

【篠田】ひとえにこれはコーディネーターの責任でございまして、まことに申し訳なく思っっております。

ただ、これは私の個人的な気持ちなのですが、サミットの時間がちょっと短かつたかなという感じがするんです。担当者の皆さんが、もう少し突っ込んだことが聞いたりできたらよかつたなと廊下で話しているのを聞きましたので、そういうことを考えますと、あの時間ではちょっと短いなという感じがいたしました。延ばしておつたのを言い訳するわけではありませんが、もう少しそこらへんも、次回については時間を考えた設定をしたほうがいいかなということは感じました。

それと、今の話ですが、できるだけ絞つた説明をいただくというのが、言うまでもなく、お互いの暗黙の了解ですので、そこらへんはやっていただかないといかんなという感じはいたしました。よろしいですか。

【北郷町・植野】それではお礼を申しあげたいと思っます。昨日から今日まで、皆様方のご参加、ご協力によりまして北郷町さくらサミットを開催させていただきまして、私なりに大成功ではなかつたかというふうに思っておるわけでございます。

私たちはこの行事を3日の日からイベントを組んでおるわけでございます。このようなさくらサミットというものがあればこそ、そういうようなイベントが生まれ、それがすなわち町民の元気の出る姿になるのではなかつたかというふうに思っております。

皆様方の大変なご協力をいただきまして、聴取者も予定どおりの受講者というか、町内外から大変多数の方々においでいただいたわけでございます。そういう意味におきましては、参加団体の皆様方のご協力はもちろんでございますが、コーディネーターの篠田先生、そして基調講演をいただきました柳生先生につきましては大変感謝を申しあげ次第でございます。

今日もいろいろご意見が出ましたが、このさくらサミットは、いろいろな話の中にも出ましたように、好きな自治体がやっているわけでございますので、なるだけこのような好きな自治体が多く参加し、そしていつまでもこのさくらサミットというものが続くことを皆様方とともに祈り申しあげたいと思っわけでございます。

今後、各自治体、ご参加の皆様方のご健勝とご多幸を申しあげ、お礼に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。

第 11 回 さくらサミット in 北郷

発行日 / 平成 11 年 6 月

発行者 / 北郷町 企画課

〒889-2492

宮崎県南那珂郡北郷町郷之原乙 1477

Tel : 0987-55-2111

Fax : 0987-55-2457